



JAPAN URBAN DESIGN
INSTITUTE

都市環境デザイン会議

東京都文京区本郷 2-35-10
本郷瀬川ビルテ113
TELEPHONE 03-3812-6664
FACSIMILE 03-3812-6828

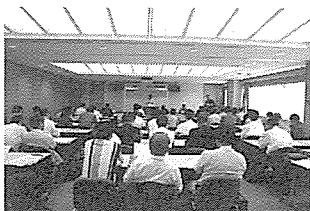
第8期定例総会

伊藤 洋

ITOH YO

代表幹事

(有)CAU・プランニング



JUDI NEWS

043 JULY 20.
1998

発行者
都市環境デザイン会議 広報・出版委員会

● 第8期定例総会	1	● ブロック例会レポート	20
● 特集テーマ：「公共のかん違いデザイン」		■ 関西ブロック	20
1. 地域景	2	■ 北陸ブロック	22
2. 都市環境デザインにおける「質」の評価	6	■ 四国ブロック	23
3. 公共の光の勘違い	9	■ 関東ブロック	25
4. 音景	12	● 委員会活動報告	25
5. 色景	14	● お知らせ	27
6. 発見システム	16	● 事務局より	28
		● 編集後記	28

10周年に向けて、更に幅広い社会的活動を！

■7月11日（土）、10：30～12：25、品川区天王洲アイル地区M1ビル25階会議室において第8期定例総会が開催された。出席者60名に、委任状143通を加えて総数203名の参加（定足数：179名）があった。岸井隆幸代表幹事の開会挨拶があり、次いで吉田慎悟代表幹事を議長に選出し議事に入った。

■第1号議案では、総務担当代表幹事、各委員会委員長及びブロック幹事より第7期の活動及び収支報告があり、承認された。総括として地方のブロックにおいて地元の都市環境に関する問題に対する意見発表やブロック活動をまとめた冊子の出版、その全国会員への配布など社会的活動が活性化され、ブロック活動が全国の会員にも知られるようになったと報告された。

委員会活動では、国際セミナー、学生向けセミナー、自治体職員向け講習会、JUDIニュースの発行など外部への情報発信を継続するとともに、都市環境デザインマップのパネルが地方のブロックや、ブラジル、イタリアで展示され、情報発信の点で主要な成果の一つであると報告された。

また会員数については、506名から536名に増加、協力法人は67社から66社に減少したことが報告され、会費未納の会員が増加していることが指摘された。

第7期収支報告については、収入が減少したが、各委員会からの返却金が多かったこと等で、予算に対して実施額が若干減ったことが報告されるとともに、この収支報告が資料の通り相違ないことが監査役より報告された。

■第2号議案、新役員の承認は、選挙管理委員長より「役員候補者届では、代表幹事の推薦候補者10名、監査役の推薦候補者2名があり、全員が当選人として選出された

こと、ブロック幹事についても各ブロックより資料の通り選出された」ことが報告され、承認された。

■第3号議案では、総務担当代表幹事、各委員会委員長、各ブロック幹事より第8期活動計画及び予算計画の報告があり、予算について収入における無理な点を見定めること、経費削減に工夫することを付帯意見として承認された。本年度の活動方針としては、■会員の交流、社会的活動の両面で情報発信、情報交流を持続的に行う。

■多様な専門家の従来の分野を超えた協働、環境デザインとしての総合化に係る議論の場を提供する。■活動の活発化に対応した運営体制、財政基盤の強化をはかる。■10周年に向けて更に次の10年間の活性化につながる活動プログラムに着手することが確認された。

■なお、若手専門家の入会問題について「現在の入会基準に実務年数を明記することは基準の緩和とは逆の印象を与えることがあり得ることから、内規として、■原則として実務経験を5年以上とする。■5年未満であっても推薦者が強く推すときには、推薦者の意見を聞いて代表幹事会が決定する、と定め、入会条件を緩和したい」と報告された。

■自由討議では、九州ブロック幹事より全国ブロック幹事会の予定が報告された。また、会員の個々の活動内容を対外的に紹介する方法を検討するよう提案された。

最後に岸井研修・研究委員長より10年目を視野に入れて、積極的に幅広い社会的活動を行うべく更に努力を重ね、皆さんと一緒に頑張っていきたい、挨拶があつて全議事を終了した。

公共のかん違いデザイン

地域景

秋山 裕史

AKIYAMA HIROSHI

(株)秋山環境デザイン研究所

公共のかん違いデザインの原因として、公共事業に携わる関係者がそのプロジェクトの自己の世界観に没入し、その結果として一つの方向に力が入りすぎ、凝縮しすぎたデザインを実践した結果に起る現象といえる。

決して悪意をもって造っているのではないが、そのプロセスの過程で何らかの『かん違いデザイン』の構造に陥り、結果的に一般的に受け入れがたいものを造っている。これを『公共のかん違いデザイン』と呼んでいる。

環境デザイナーの集まりである「環の会」の展示会が1998年6月に開催され、この時展示されたパネルを基に今回の特集は構成されている。『公共のかん違いデザイン』を地域景、街具景、光景、音景、色景、CGシミュレーションシステムからの検証を行い、それぞれの立場からの視点を列挙している。

今回の主旨としては『勘違いデザインの構造』に重点をおいており、出来上がったものを誹謗するのではない。デザイナーとしての自戒をこめて、それらを21世紀へのよりよい日本のデザイン活動の糧としていきたいと思っている。

『かん違いデザインの構造』

- ①発注者の経験不足
- ②設計者の経験不足
- ③ヒエラルキーの弊害のかん違いデザイン
- ④視野狭窄のかん違いデザイン
- ⑤担当者三年交代制が生む価値判断の正誤
- ⑥地域性の表現かん違いデザイン
- ⑦日本全国子供化現象によるかん違いデザイン
- ⑧箱庭的発想のかん違いデザイン
- ⑨補助金の弊害によるかん違いデザイン
- ⑩アノニマス（匿名）による曖昧かん違いデザイン
- ⑪予算消化のかん違いデザイン
- ⑫時代のかん違いデザイン

1. 生な地域性の表現

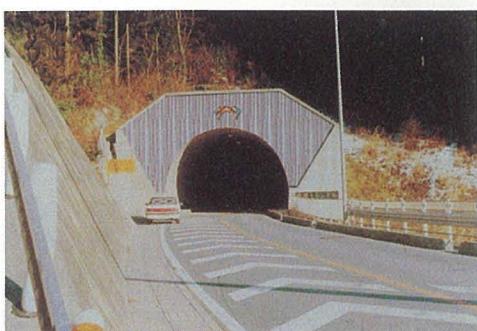


▲生な地域性表現（秩父市 寄国土トンネル）

地域の伝統的な獅子をモチーフにした意味合いは理解できない訳ではないが、トンネル坑口周辺環境を含めた最終的なデザイン処理に問題が残る。極彩色の獅子のレリーフはトンネルの装飾とし

ての視覚的なインパクトやマスコミ等へのニュース性としてのインパクトはあるが、結果的に知名度が上がることははあるが、トンネルは公共施設として不特定多数の利用者を対象としており、その普遍性を考えるとデザイン処理に問題があるといえる。トンネル坑口の表層装飾として地域の伝統的モチーフをはじめ絵的にいた箱庭的な発想の一つといえる。

トンネル坑口だけをとらえるのではなく道路景観として周辺環境との関係性を充分に考慮したデザイン調和が必要である。それらを前提に多様なデザインのバリエーションが可能であり、それらをベースにした地域性の表現が望まれる。



▲CGシミュレーション（秩父市 寄国土トンネル）

獅子の絵柄をスケールダウンさせ、坑口の中央部にシンボリックに配した。全体的にはおとなしい表現にしており、シンボリックな地域性の表現としてはこの程度のスケール感で適当といえる。

2. ほどよい地域性表現



▲ほどよい地域性表現（沖縄自動車道）

トンネル坑口の単調になりやすいコンクリート面に、沖縄瓦やシーサー、植栽を配し、地域性を感じさせる道路空間を創出している。その坑口のデザインは沖縄の高速道路を走る観光客にとって沖縄をイメージさせリゾート地への期待感を盛り上げている。沖縄瓦の全体的な分量やシーサーの大きさなども程よく、獅子のレリーフに比較すると全体景観を考慮した地域性表現としてはほどよい表現であり、好感がもたれる。



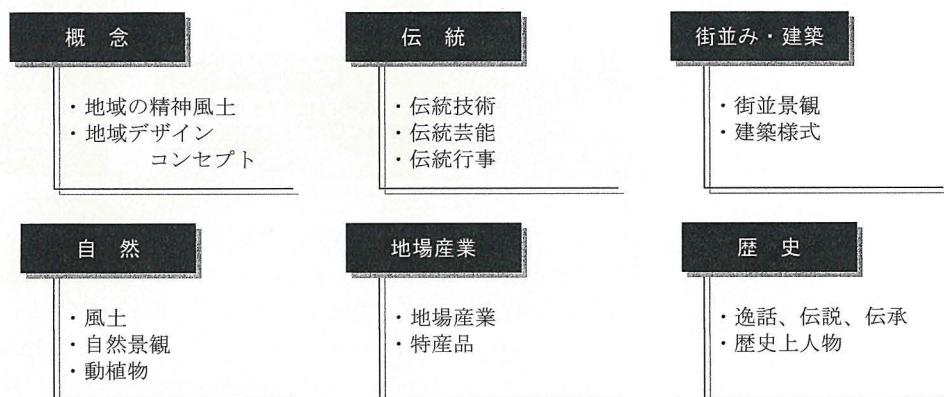
▲CG シュミレーション（沖縄自動車道）

かん違いデザインの一つとしてスケールアウトがあげられるが、この写真のようなかん違いは比較的多いといえる。

3. 地域性の表現

公共のかんちがいデザインの一つに地域性の表現があげられる。そのかんちがいデザインの出来上がった要因として、地方の時代と言われ始めた頃から『地域らしさ』を公共施設に求められ、それらのデザイン検討に充分な時間と質のチェックをかけずに早急に公共施設の表層に貼り付けてしまったものが形造られた結果ではないかと推察される。地域性を表現する上でデザインソースとなるテーマには大まかに以下のような項目があげられるが、そのテーマの選択の正当性、テーマを具現化するデザイン力、デザインの質を見極める発注者側の見立ての目があつて始めて地域性のある公共施設のデザインが可能といえる。

■公共施設に見られる地域性のデザインテーマ



J R 飯田橋のコンクリート壁面が殺風景であることから地元と J R により美術大生に依頼されてできた鯨をモチーフにした壁画。鯨と飯田橋との関連性はまったくない。バトンガールや鼓笛隊もでた除幕式の風景はN H K のニュースで放映された。(東京 飯田橋)



J R をまたぐ陸橋に設置された江戸城をイメージした親柱。近隣の主婦から新聞に投書が掲載され、デザイン的質を問われた。その結果手直しされたのがこの親柱であるが、どこを直したかがわからない。(東京 飯田橋)



上の鯨の壁画タイトルは「いいだべえ」。良く見るとその文字が鯨で書かれている。(東京 飯田橋)



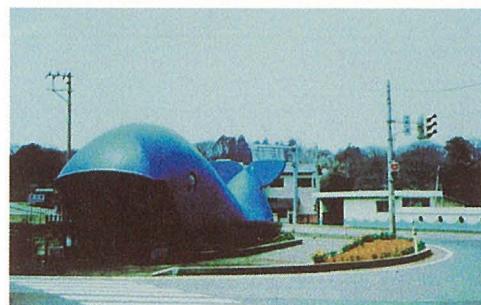
上写真の詳細。夜になると城の窓部分から光がもれる。陸橋 4箇所に設置。横断防止柵にも城の石垣をモチーフにしたレリーフが設置されている。



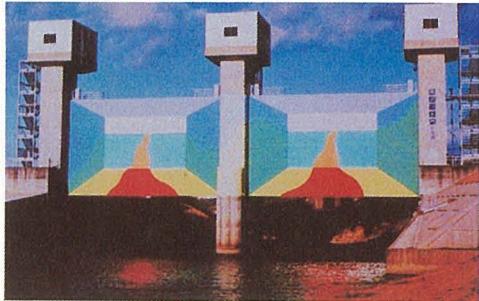
かえる大橋。町によるコンペを行ってできた橋。街並みはいぶし瓦による落ち着いた街並み。いなみかえる五か条 一、考える 一、人を変える 一、町を変える 一、古里へ帰る 一、栄える。(和歌山県 印南町)



山を削り、描いた村制百周年を記念して造られた村長デザインの大壁画。底辺 100m、高さ 55m。壁画のテーマは「山に描く花園の夢」
(和歌山県 花園村)



地名くじらなみにちなんでできた地下道の入り口。くじらなみ駅舎は鯨と波が描かれている。地下道入り口の鯨は時間になると潮吹きの変わりに水が出る。(新潟県 くじらなみ)



建設省東北地建が平成 2 年から 3 年度にかけて建設事業のイメージアップを図るために取り組んだ事業の一例集の一例。「鮮やかな色彩がゲートのイメージを一新」というヘッドコピーがついており、地元紙にも掲載されドライバーにも好評を得ていると説明している。(宮城県 津山町)



二階はカッパのミイラがあるカッパ資料館。れっきとした J R の駅舎。駅前の待ち合わせの目印にカッパのシンボルがあり、駅のホームにはカッパの彫刻が出迎えてくれる。町を歩けば舗装にはカッパのイラストがあり、橋を渡れば高欄、親柱にレリーフが施されている。町は全体は静かたたずまいである。ふるさと創世資金を利用してつくられた。(福岡県 田主丸町)



白壁風のトンネル壁面。必然性が理解できない。
(広島県)

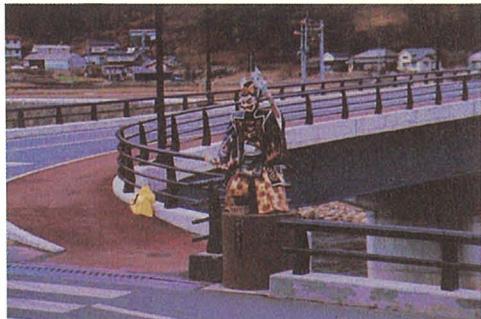


地上機器に施された、コンクリートによる擬石仕上げ。周囲と調和させようと意図したものであると思うが、逆に浮き立ってしまっている。

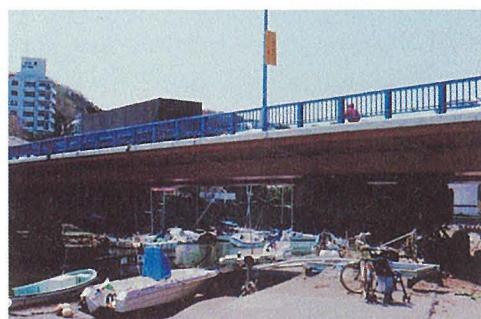
(東京 九段下)



メンテナンス扉のある側面は擬石仕上げがされていない。これで見る限り擬石仕上げは必要としない。



山間を走っていると忽然と現れる神楽橋の親柱。神楽の彫像の完成度は高いが橋梁とのバランスに問題が残る。



海岸脇の橋梁で船舶の色をイメージした色彩であるが、近くで見ると眩惑される。
(神奈川県 逗子)

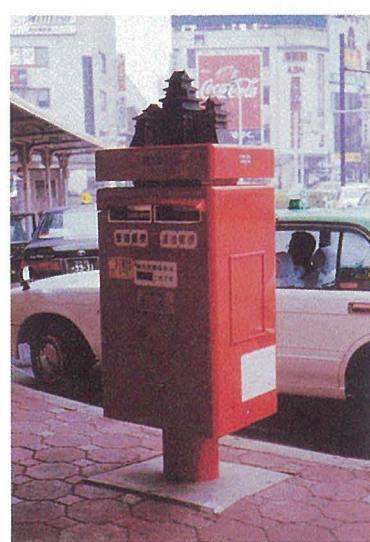


地元の児童による絵をブロックに転写した事例。いわゆる市民参加のシステムはよいが、全体的なデザインの取りまとめが必要である。

(愛知県 名古屋市)



時代の勘違いによる日本橋上の高速道路。この高速道路がいつなくなるかは日本人の見識にかかる。



地域のシンボルである松本城をポストに取り付けて地域性を表現しようとした事例。「ポスト本体も石垣にすれば良かった。」と担当者は反省している。(長野県 松本市)



新幹線からみる富士山。一番のビューポイントであるが煙突が景観を阻害している。今後 100 年の計で煙突が見えなくなるように計画を行なるべきである。

都市環境デザインにおける『質』の評価

田中 一雄

TANAKA KAZUO

(株)GK設計

はたして、「勘違いデザイン」という評価に正当性はあるのか？それは、視点の違いによるものであり、簡単に評価を下すことはできない。しかし、何かが違うという認識に誤りはないのであろう。

一般に、こうした現象は、そのデザイン手法が批判されがちである。例えば、特産品による地域性表現や、戯画的具象デザイン、景観から突出した存在など。

しかし、問うべきは、そのデザイン手法ではなく、デザインの『質』に対する真摯なまなざしを失っていることなのだ。

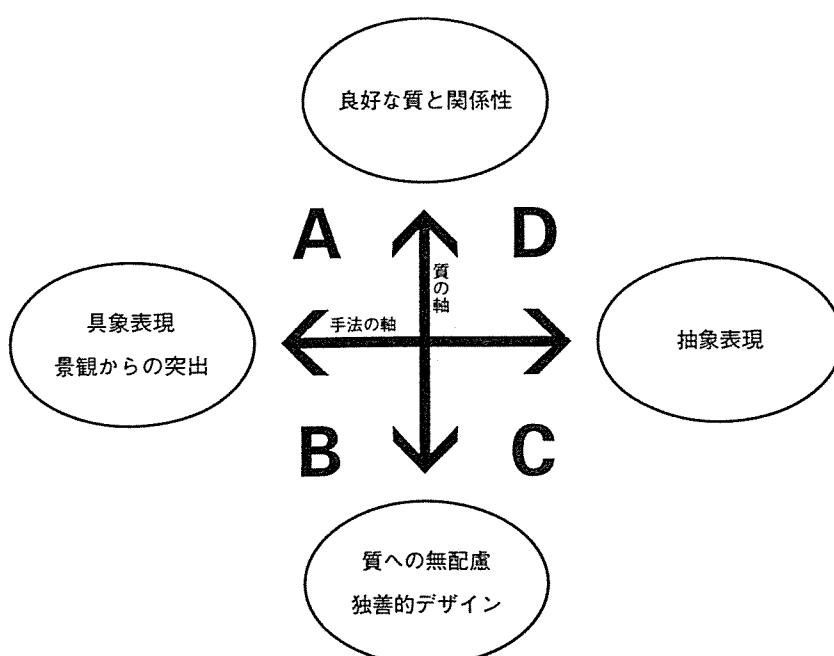
■ 『質』もしくは「完成度」

私は、このような問題のほとんどが「デザイン的な質」の評価能力の欠如によると考えている。「デザイン的な質」とは言いかえると「デザイン的完成度」とでも言える価値基準であり、対象物の造形的レベルや、周辺環境との関係性などが熟考されているかが問われる。こうした評価視点は、定量化が難しいものである。そこで、対象となる計画の規模や社会的影響が大きいものについては、有識者委員会などによって、ある程度の客観的評価が行われている。しかし、すべての計画においてこうした手続きがとられるわけではない。むしろ大多数

は、その企画、設計に携わる担当者の能力と判断に委ねられる。特に、都市景観デザインの領域においては、デザインの「完成度」よりも基本的コンセプトや、それによってもたされる街の「魅力、個性」などが重要視される。そのため、何らかの特性づけが行われていれば、そのデザイン的質は問わない傾向がある。結果的に、芸術や他のデザイン領域と比べ「質的評価」の比重は薄くなっている。勿論、環境デザインの世界においても各種の景観賞が設定されその啓蒙普及に努められている訳であるが、その視点は様々であり、評価される対象のレベルも定まっていない状況と言えよう。

■ 「勘違いデザイン」の成立過程

デザイン的質を持ち得ない「勘違いデザイン」というものがなぜ成立してしまうのか。そこには様々な要因が考えられる。公共事業においては、地域性の重視が社会的に要求されるとともに、民間の広告物的手法を安易に導入してしまったことが最大の問題であろう。その背景には、デザインに対する認識の低さと歴史の浅さもあって、こうした事を無神経に実施してしまう感性の問題がある。そして、それが問われぬままに普及してしまったことが問題をさらに



一般的には右の象限と左の象限の差は認識されるが上の象限と下の象限の差は認識されにくい。AとB／CとDは同じと判断されがちであるが、そこには『質』の違いがある。またDは日常風景として評価感覚が麻痺してしまっている反面、Bについては「面白い、楽しい」という面で評価されてしまう。一般的には、各ベクトルの『右か左か』という議論になりがちだが、本質は『上か下』の問題である。但し、何を以って上か下かとすることが一番難しい課題である。

深めてしまった。また、行政の特性として、現象が一般化するともに前例が前例を生み連鎖的に発生していったことが考えられる。さらに、こうした動向に対して、批評性を持ちえなかった設計者や、少なからずそれに迎合し助長した製造メーカーにも責任がある。また、景観デザインに対する理解力を持たないメディアが、批判すべき事例を逆に評価してしまったことの責任も重大であろう。

■ 「手法」と『質』の評価

景観的に不釣り合いなデザインといわれるものの多くは、「具象的な地域モチーフを引用」をデザイン手法としている。これは、建築や工作物などを、地域の特産品や民俗的モチーフを具象的に表現したオブジェと化してしまうものである。また、対象物を単体でしか考えず、その悪しきデザイン効果を強調させるために「景観から突出した存在」となった場合も数多くある。しかし、問題解決のためにこうした「手法」や「現象」を逆転すれば良いというものだけではない。「地域モチーフの具象的引用」の対立概念としては「抽象的、無機的デザイン」を考えられる。また、「景観からの突出」に対しては「景観への同化」が想定される。だが、こうした「手法」の転換によってより良い『質』が保証されることはない。また、単なる逆転思考は、街の魅力を喪失させるという批判も理解できる。もちろん、シンプルで抽象的な形態や、風景に馴染んだデザインは、無難な選択であることに違いないが、答えは単純なことは済まされないのである。

■ 二つの事例から考える

繰り返すが、問うべきはその『質』あるいは『完成度』である、地域モチーフをトッピングしたストリート・ファニチュアであっても、そのデザインの質が高く、なおかつ周辺環境との関係性が考慮されている事例もある。

一例をあげれば、ニューヨークのピア17のサインデザインがある。ここは、サウスストリート・シーポート開発の一部であり、イーストリバーを望む絶好のロケーションと、シーフードレストランなど多彩な店舗の魅力で常に賑わいを見せる複合商環境である。そこに設置されたサインは、豊かなグラフィック表現がされており、上部に魚の彫刻が取付けられている。これは、デザイン手法のみを見れば、名産の魚をのせた日本の電話ボックスと同一であるが、

見事に空間に調和しイメージアップに役立っている。やはり、その巧みなデザイン性と景観的なバランス感覚の賜物であろう。

また、「景観から突出」した存在であっても、周辺環境との関係が充分に考慮され、作品の『質』が高いものであれば、良好な事例となる場合もある。例えば、ハノーバー市のバス停は、まさしく空間のオブジェとなるストリート・ファニチュアであるが、良好なパブリックアートとして評価されている。これは「バスストップ・プロジェクト」といわれる計画であり、9人の著名なアーチストや建築家による作品群である。その計画には5年の歳月を要し、今や市のシンボルの一つとなっている。そのプロセスは、各作家が市内のバス停や路面電車の停留所のなかから、それぞれ一箇所を選定し、その場に対するパブリックアートとして制作された。先ず、モデルが作成され美術館で展覧会を開催した。そして、そのあり方について全市で徹底した議論がおこなわれた。日本における住民参加というと、市民が直接イメージ作りする立場となる場合が想起されるが、「手」ではなく「声」としての住民参画がおこなわれたわけである。これもまた、景観における強い存在感という意味では、日本における名産の果物を形どったバスストップなどと同一であるが、そのコンセプトとプロセスによって結果は全く異なったものとなっている。

このような二つの事例を見ると、問題の所在が「手法」ではなく『質』にあるということが理解される。土木においては、美やデザインという概念が浅く、時代が「地域性を活かしたデザイン」を求めたとき、地域モチーフの安易な引用による装飾に走ってしまった。しかし、こうした『手法』そのものが問題なのではなく、その『質』を問わなかつたことが過ちだったのである。

■ 『質』そして「美」へ

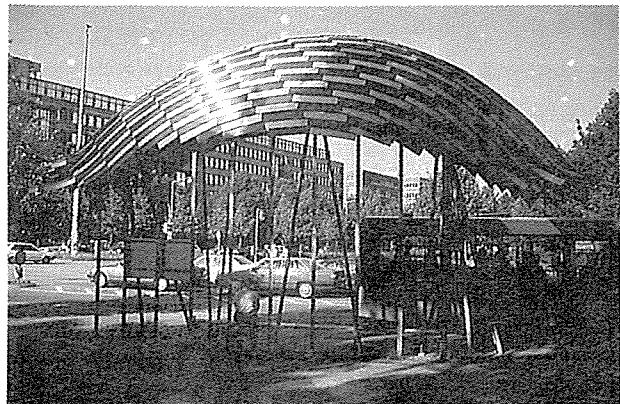
『質』はどの様にして獲得されるのか。その条件としては、空間の時間的連続性と対象物との関係や、場所の特性によるコンクエストを踏まえた的確な位置づけが必要であることは言うまでもあるまい。こうした、時空的関係性のデザインの上に、デザインの美的価値に対する視点を考えておく必要がある。

デザインの完成度が高い設計はニアリィコールで何らかの「美しさ」を備えている。そして、「美しい街づくり」や「都市美」など、都市環境デザインにおいて「美」は

重要なキーワードである。しかし、一般に「美しい」という評価は不確実もしくは主観性に属するものと判断され評価が困難でもある。また、「美くしさ」は表層的な評価と考え、それ以上に人間性などの多様な価値を重視すべきとする視点もある。確かに、都市とは複雑なものであり「美」そのものを目的化することは間違いであろう。しかし、こうした評価軸の曖昧性が、結果的に「美」に対する追求力を減退させていることも事実である。さらに、現代の美学がネガティブな価値をも「美」に包含すると考えるように、都市に対して「猥雑の美学」という価値が成立することも問題を複雑にしている。それは「人間性」や「情

感」という観点において評価しているものであり、日本の特性と言えるかもしれない。これは、同じ「人間性」の評価において、啓蒙主義以来の流れから「理性」を主題に置くフランスの都市デザイン姿勢などとは対照的視点である。都市は公共のものであるが故に、このような評価軸に対する是非はつけ難く、断定的評価にもなじまない。しかし、一方で明らかな意志のもとに「美しさ」というポジティブな価値を推進していくことも重要ではないだろうか。こうしたデザイン評価を考える時に、必要なことは判断の困難なものを避けるのではなく、『質』に対する議論を深めていくことが求められているのだ。

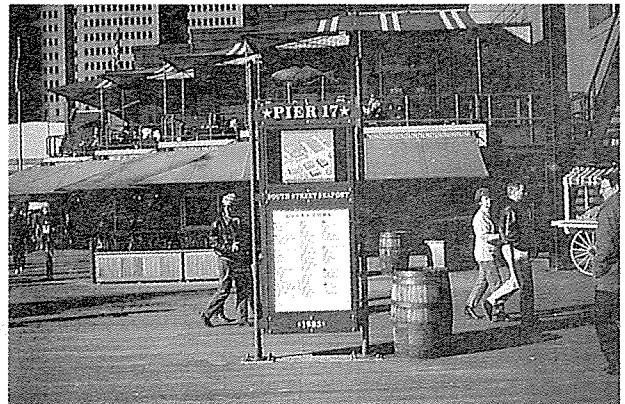
事例1



■フルーツのバス停との違いはなにか。

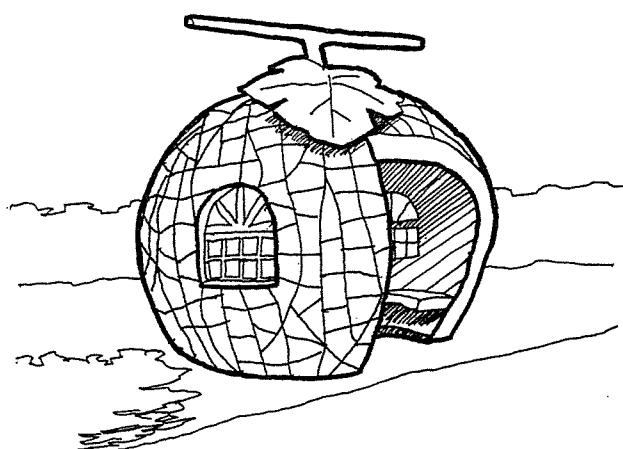
Design Frank O.Gehry
HANNOVER/GEMANY

事例2

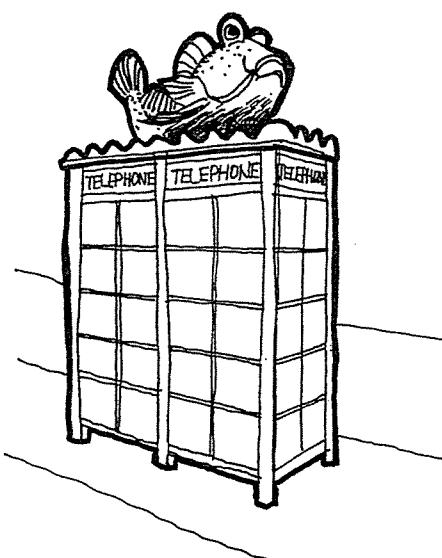


■一見、特産品付の電話ボックスと同じようだが？

PIER17 Signage N.Y./USA



■名产品をリアルに再現したバス停などは象徴的事例か。



■特産品のトッピングは、日本的地域性表現の手法だが。

公共の光の勘違い

面出 薫

MENDE KAORU

(株)ライティング プランナーズ アソシエーツ

「あの人、何か勘違いしてるんじゃない?」「ねえ、ちょっとオジサン、勘違いしないでよ!」と、まあ、こんな会話は日常茶飯事で、つまりよくあることな訳です。いちいち自分のしでかす勘違いなどに気を使っていては身が持たない、と言われる通りの代物かも知れません。しかし私は、環の会という特殊な団体の展覧会やシンポジウムに加担し、「公共の勘違いデザイン」と命名されたワークセッションに参加したことによって、この勘違いについて随分と深く考えさせられました。その結果、勘違い甚だしいことは見過ごさずに、大声をあげて「そりや大変な勘違いだ」と言って騒いだほうが良いように思えてきました。

「いや、ちょっとした勘違いなのですから・・・」ではすまない現状があることも解りましたし、こと明かり／照明／光の勘違いについては、私たち日本人が世界の笑い者になりかけていることさえあるのですから。

先ず、勘というのはいい加減なようで、実は大変重要なセンスであることに気づきました。「勘の悪い子だねえ」と叱られた時は、ほとんど「頭の悪い子だねえ」という風に解釈できるわけで、人生の中でも勘が働くかどうかは致命的な結果の相違を生むことも少なくないのです。ジャイアンツの監督、長島茂男は勘にのみ頼っていて、これまた期待される成果がでないわけは、そこにあるのですが・・・、通常には勘が良いことは誇れることなのです。つまり勘とは直感力に似たところがあって、物事の本質や行方について見抜く力でもあります。

その勘が働くかない状態が勘違いなのでしょう。通常では勘違いとは大きな過ちではなくて、ちょっとした小さな過ちを意味します。大きな過ちであれば周囲の人からも指摘され、犯罪にさえなることもあるのですが、ちょっとした過ちにはなかなか気づきませんし、罪を問われることは先ずありません。勘違いをしている当人は全く気づいていないのです。ですから、勘違いをしている人の多くは善良な人です。しかし、如何に善良な人であれ、勘違いは不幸の始まりでもあるのですから、できるだけ勘違いしている人を傷つけずに、優しく気づかせてあげたほうがいいに違いありません。特に公共空間に見られる勘違いデザインには色々な立場での勘違いが見られます。行政担当者の勘違い、住民の勘違い、デザイナーの勘違い・・・などなど。この勘違いの種類については、数ページ前に環境デザイナーの秋山さんからご紹介いただくこと

になっていますが、まあ、ほんとに世の中勘違いだらけだ、といつても過言ではないほど、たくさんの種類の勘違いが重なり合っているように見えます。しかし実は、そう言っている私たちデザイナーの方が、状況に対して我田引水的な勘違いを押しつけている場合さえあります。

勘違いはセンスの問題であったり、思想信条に近いものであったりするので、強引な評価のみでは議論になりません。「どっちが勘違いをしてるんだよ」というようなこともよくあります。勘違いはほとんど誰でもしてるもの、そのようにわきまえて勘違い議論をすれば建設的な結果が得られると思うのです。

5つの光の勘違い

私たちの会社は照明デザインを仕事にしていますが、常々「机の上で仕事をするなよ」というようなことを言っています。つまり光のデザインは街に出て、巷の光を深く観察し体感ながらやろうじゃないか、と思っているのです。ビジネス以外の課外活動を照明探偵団と呼び、仲間と一緒に活動することによって「目のウロコ落とし」をしてきました。ここで言う目のウロコとは勘違いに他なりません。この探偵団活動を通じて日本の都市に見られる「5つの光の勘違い」を発見しました。戦後に始まる日本の近代化が作りあげた暗黙の光のルールみたいなものですが、この常識的な近代光に、実は勘違いの出発点があると思われます。

先ず光の勘違いの筆頭は【まぶしい光】です。近代の日本人はどうも、まぶしい光=明るい光という風に勘違いしてきた様子です。欧米を旅する日本人は、ホテルの部屋が薄暗いと言ってスタンドのセードを外して電球を露出させてしまう、と言う笑い話を聞きます。薄暗いのが侘しかったり、間接照明のようなものより直接的な効率のよい光が欲しかったりするようです。また、オフィスの天井に巣くう安物の蛍光灯もまぶしさの典型です。

オフィス什器だけは世界一級の人間工学に基づいた高価なものを使っているのですが、全般照明はコンビニなみ。通常視野での蛍光ランプを直視したときの目の疲労は想像以上のものなのです。このようなオフィスで仕事をしている人はツバの広い帽子をかぶって、蛍光ランプが直視できないほどにツバを下げると、極端に目が楽になります。簡単なまぶしさテストです。このようなまぶしさ(=グレアという)は公共空

間全域に蔓延しています。道路灯、商店街の街路灯、広場公園灯、駅舎、地下街、公共建築などなど。何処を見ても、このランプ剥きだし現象に出会います。誰が勘違いしているのですか？ 行政、住民、照明メーカー、照明学会、照明デザイナー・・・？ 多分全員の勘違いの結果です。

2番目の勘違いは〔白い光〕です。白は明るい戦後の代表選手でした。衛生陶器が白であり、自家用車も白、集合住宅の壁紙も白、そして住まいの明かりまで昼を再現するかのような白い光で満たされてきました。日本人の好きな光源は、白色蛍光ランプと蛍光水銀灯というところに相場が決まってました。しかし、住まいはオフィスや学校や工場の光とは基本的にことなる質の明かりを求めていました。日中の太陽は白くとも、日没近くになると太陽高度を下げて、黄色からオレンジへと光の色を変化させる、それが生態系のバイオリズム、24時間の体内時計の快適性なのです。ですから俯瞰してみる東京の夜景や、家々からこぼれる住まいの明かりが真っ白なのを見ると、日本人は勘違いをしてしまったな、と思うのです。光の色は白ばかりではありません。

3番目は〔たっぷりな光〕です。たっぷり飯をくえることは、敗戦後の取り敢えずの豊かさでしたが、都市機能が充足した後にまで、味はともかくとして飯をたらふく喰いたいとするのは、ほとんど過食症と言わざるを得ません。なるほど戦後の日本は高効率な社会や市民生活を目指してきたので、にわかにJISの推奨照度基準も諸外国に比べて高い数値を示しています。光の量が繁栄のバロメーターであったのです。理屈の上では少量の食べ物で高効率な仕事をすることが望まれていますが、一度手にした量への既得権や飽食の時代感覚は、簡単に拭い去れるものではありません。光の量の足し算ばかりしてきた私たちは、必要以上のエネルギーを日常的に浪費していることに気づくべきです。今、課題にしなければならないのは、光の量ではなく質なのです。僅かな美味しい食べ物で、どのように美しい体を作るかが課題です。そのためにはまずは飽食を止めなければなりません。光のダイエットをする必要があるのです。

4番目の勘違いは〔均一な光〕です。光が均一であることは大切なこともあるのですが、いかんせん日本人は均整度を重要視してきました。さほど広くもない部屋の中を隅から隅まで同じ照度を望んだり、道路

や公園のような広い空間でさえ限無く照らし出す、と言うことに神経を尖らせてきたのです。あたかも暗い個所や陰りができるることは罪悪だと言わんばかりに、均整度が高く、影のできない工夫をしてきました。それはさながら太陽光のもとに分け隔てなく照らし出される街角に似ています。しかし、太陽の沈んだ後に再び、その真似事をすべきなのでしょうか。夜間は闇が主役なのですから、光を人工的に使う場合にも光と闇の共生を計るのが正しい姿です。均一な光はオフィス空間や体育館、スタジアムなどには重要なことも多いのですが、リラックスすべき住宅や散策のための遊歩道、気のきいた公園などには不需要です。不均一であっても、むしろ光と闇のリズムを感じられるほうが、心休まり自然な夜を感じとれるのです。私は多くの空間で不均一に賛成するのです。

最後の勘違いの要素は〔変化しない光〕というものです。少し解りづらいかも知れません。私たち人間の生活の快適性は時の変化に支えられています。大きな意味では辛い出来事に遭遇した時にも、月日の流れが少しづつ心を癒してくれるよう、時間の経過は欠くことのできない生活必需品なのです。しかし、近代の照明技術はできるだけ変化なく、時間経過を忘れさせることに心碎いてきたのです。つまり、全く疲労しないで点灯し続けるランプの開発や、いったん照明を点けると消すまで変化しようのない照明設備を提供したわけです。少し前の時代には、このように安定してた光源がなかったので、何時も光は時間の経過を感じさせるための重要な役割を持っていました。灯火の時代には、油の量や蠟燭の量は時間の長さに換算されました。月の満ち欠けや雲の流れは、夜の都市に時間の移ろいを与えていたはずです。変化しない安定した近代の照明は、意図的な変化を与るべきなのです。全く光の変化のない部屋は、現代の拷問室に似ています。視覚的に認知できる移ろいが必要なのです。光を変化させて気持ちを入れ替えていることが、快適さにつながると思うのです。

長々と一気に書き進んでしまいましたが、明かり・光・照明に関わる勘違いはこの他にもたくさんある事例があります。「照明には力を入れたんです」と行政担当者が自慢げに語る時には要注意です。街路灯のデザインがグロテスクだったり、たくさんのまぶし光が集合してたりもします。照明器具にお金を掛けて、昼間の造形デザインに凝ることが「力を入れた」証だと思っている

様子です。私の会社は渋谷区神宮前5丁目にあるのですが、その近くの通称チャットストリートには、意味不明のガードレールに並んで、ただただ迷惑なだけの特注デザインの街路照明がたくさん建っています。私は毎朝そこを通るのですが、本当に腹が立ってなりません。「誰がこんな勘違いをさ

せたんだ！」と毎日思っています。夜遅くそこを通過すると、今度は眩しい光が空中にたくさん浮かんでいて、そこを通る人の優しい表情もよく見えない状況です。困ったものです公共の勘違いデザインは。困ったものです、ダラダラとした文章も。



マンションの6階に入り込む光の家宅侵入罪



光の家宅侵入罪の犯人は都立越中島公園のランプむき出しポール灯



ドライバーの目もくらむほどの現代の不夜城



オフィス照明の2倍ものエネルギーを使うコンビニ照明



増殖を続ける自販機に占領された街角



ジハンキは横から横への光を発する照明器具



電照菊の里と呼ばれる渥美半島の赤羽町、芸術的な夜の景観



しかしビニールハウスの中には眠れない緑たちが息づいている

音景

鳥越 けい子

TORIGOE KEIKO

音環境デザイナー

サウンドスケープ研究家

聖心女子大学

「音の景」に出没する「公共のかん違いデザイン」にもさまざまなものがある。ここでは、たまたま私自身の通勤路にあたる東京の渋谷駅から、二つの事例を、具体的に紹介してみたい。

1. 工事現場に出現した自然の音風景

京王井の頭線渋谷駅では、今年の春まで、数年にわたる改修工事がおこなわれていた。工事中、連絡通路では、仮設天井に設置された複数のスピーカから、野鳥の鳴き声が流されていることが多かった。

台風の日でも、終電近くの夜中でも、変わらずに鳴き続けるその「さわやかな？」野鳥の声を聞くにつづけ、私は、その場の風景にある種の「ゆがみ」を感じて、ときどきして気分が悪くすらなった。

スピーカから聞こえていたのは、その路線の向う先、井の頭公園では決して耳にしないような野鳥の声だった。そこである日、現場の音を録音して、知人の野鳥専門家に聴いてもらった。すると、そのテープの声の主は、エゾセンニュウ、アカショウビン、センダイムシクイ、アオジといった鳥たち。草原と森林の双方がある、ちょうど釧路湿原のような自然の音風景が、昼夜や天候、季節の区別なく都心の工事現場に出現していくことになる。

閉鎖されたプライベート空間や商業空間は別として、このように、自然の音が本来の風景のコンテキストから「要素」として

切り取られ、そのままの形で、都市の公共空間にコラージュ的にはりつけられる事例は、本来の「五感の真のバランスのとれた環境」「生態系までをも含めた本物の環境」「公共空間のもつべき環境倫理」など、いずれの観点からみても、まさに「かん違いのデザイン」の何物でもない。

この「自然音による人工的演出のかん違いデザイン」には、古くは山の手線の鶯谷駅のウグイスの声から、最近オープンした恵比寿駅の駅ビルのエスカレータ吹き抜け空間部分の音の演出まで、他にもいろいろなタイプのものがある。が、井の頭線渋谷駅の場合には、騒音を含めた工事現場の悪条件を少しでも緩和するための、最も予算のかからないという意味で「安手の」、かつ「音」だからこそ後で撤去する必要もない「簡便な」サービスとして行われた例として位置づけられることも含めて、とりわけ大きな問題をかかえていると言えよう。

2. 発車ベルになったピアノの音

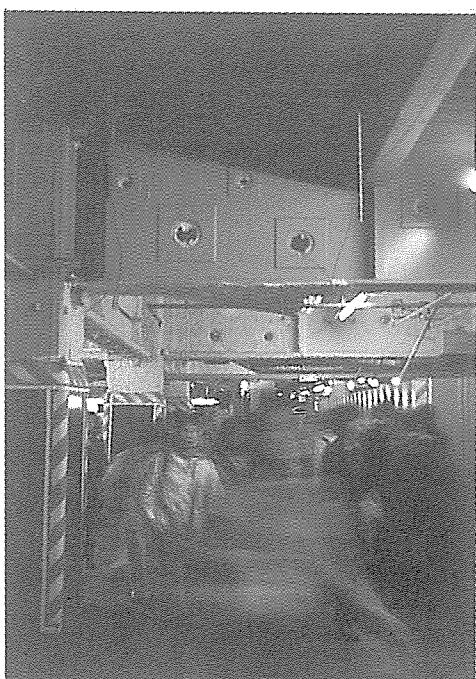
さて、井の頭線を降りて、JRに乗り換えるとするとき、都市の音景におけるもうひとつの「かん違いデザイン」を耳にすることになる。

山の手線の渋谷駅では、発車ベルとしてピアノによる旋律が用いられている。これは、新宿駅でも聞くことのできる元祖「メロディベル」のひとつである。

新宿駅と渋谷駅のメロディベルは、今から約10年前に初めて導入されたもの。中心となったのはむしろ、都庁移転を控えていた新宿駅で、ちょうど国鉄から民営化された新生JRが、それまでの「汚い、うるさい、怖い」新宿駅の暗いイメージを、「快適で分かりやすく、親しみやすい」を目指しておこなった、駅の総合デザインの一貫だった。

視覚環境の改善に留まらず、聴覚環境のデザインにまで配慮をしたその試みは、基本的には大いに評価できる。また、プラットホームに設置するスピーカの数を増やして、ひとつのスピーカからのベルの音量を強大にならないように押さえたり、路線の違いを「色」だけでなくベルの「音の違い」によって伝達しようとする「聴覚的ピクトグラム」など、公共空間における音の情報デザインとしては、いくつかの意義ある試みが展開されたという意味でも、特筆に値する。

けれども、売り物としている「楽器の音色」と「メロディ」については、やはりいくつかの「かん違い」を指摘することがで



改修中の井の頭線渋谷駅

きる。

まず、渋谷駅の発車ベルが用いているピアノだが、もともとピアノという楽器が開発されてきた、西洋近代の芸術音楽の伝統と、コンサートホールに代表されるその独自な音響空間とは不可分な関係にある。この点では、その音色は、駅のプラットホームという公共空間で、毎日おびただしい回数演奏される「発車ベル」として用いられるのは、何とも不適当な素材であると言わざるをえない。

メロディに関して言えば、さらに複雑な問題がある。発車ベルを利用者の立場から情報的に分析すると、最も大切なのが、次の瞬間にドアが閉まることを意味するベルの「鳴りやむとき」。つまり、「音」にも増して、その後にくる「沈黙」にこそ、肝心な情報が含まれていることになる。

ところが、一定のフレーズが繰り返されるメロディベルの場合、フレーズとフレーズの間には常に一定の「休符」が含まれるため、ベルが本当に鳴り終わったのか、それとも単にフレーズのとぎれ目であるのか区別のつきにくいことがある。反対に、フレーズの途中で、ブツッとメロディが途切れてしまうこともある。こうした観点からは、従来のフラットラインの発車ベルに対し、メロディ化したことが必ずしもデザイン的に「改善」につながったとは思われない。

このような「メロディベルの導入」には、

「楽器の音、かつメロディならば騒音にはならないだろう」といった安易な態度も感じられ、新宿や渋谷駅の場合など、新しい音響デザインの試みとして評価できる多くの点があるだけに、残念に思われてならない。

「楽器」の音色やメロディをそのまま用いるのではなく、従来の発車ベルの伝統を踏まえながら、今後、より本質的な次元でのデザイン活動が展開されていくことを期待したい。

以上、駅を事例に、身近な都市の公共空間における音の景のかん違いデザインを紹介した。「音の景」から見た「公共のかん違いデザイン」には、他にも、国立公園その他の景勝地で、そこに設置されたスピーカーから常に流されている音楽等によって、その場本来の音の風景がかき消され、聞こえなくなってしまっているという、更に大きな問題を忘れてはなるまい。そこには、上記の駅における「かん違いデザイン」同様、環境やよりトータルな風景との脈絡を無視して、「アメニティサウンド=快適音」としてとらえてしまう、要素主義的発想によるアメニティ思想の誤解とそれに基づく運用があると考えられる。

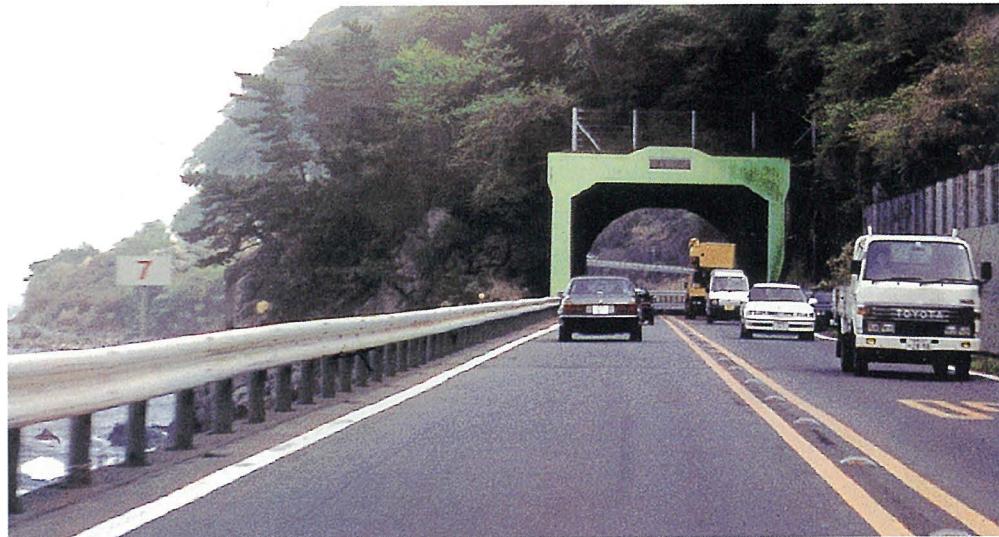
音の景におけるかん違いデザインを少しでも減らすためには、まず何よりも、「しかるべきところにしかるべき音」という、アメニティ思想の本質に正しく立ち返ることであろう。



JR山の手線渋谷駅のプラットホーム

色景

中嶋 猛夫
NAKAJIMA TAKEO
女子美術大学



真鶴有料道路 屏風岩トンネル

1. はじめに

真鶴半島は、神奈川県の緩やかに湾曲する相模湾の西の端にたったひとつ突き出た岩場の半島で、磯釣やダイビングの名所である。

交通渋滞で有名な真鶴有料道路はこの半島と東の小田原市を結ぶ10kmほどの距離で、そのほとんどが海岸沿いの切り立った崖下に設けられていて、露出する巖に打ち寄せる白波と松は典型的日本画をイメージさせる風光明媚な所です。

2年ほど前この道路の中程にある屏風岩トンネル入り口のコンクリート柱とトンネルの手前に続く高さ3m長さ50mほどのコンクリート擁壁が美しく塗装された。

ところがその色が明るい鮮やかないわゆる黄ミドリ色で周辺の自然環境にそぐわない遊離した景観をつくりだしていて違和感(不快感)を感じた。

特に大きな問題と感じたのはコンクリート擁壁部で、平坦な広い面積にこのような色を道路沿いに配色することは、単に景観上の問題のみでなく夏場の強い照り返しを考えると交通上危険でもあります。

その日は用事があり何か吹っ切れない気持ちのまま通り過ぎ、2~3ヶ月後その場所へ行くとコンクリート擁壁のみダークグリーンに塗り変えられていきました。当初の色よりも暗く落ち着いた色になったが不自然さはぬぐえなかつた。

なおトンネルの入り口のコンクリート柱の黄ミドリ色は現在もそのままで崖沿いはエイジングで一部汚れて来ている。

2. 道路景観と塗装色

この事をきっかけに今年の春に真鶴有料道路を調べて見ると、早川と根府川の間に橋梁とコンクリート擁壁にはほぼ同色が塗

装されていた。

一箇所は早川に近い所で20mほどの長さの橋梁とそのコンクリート台座で、暗くなりがちな橋の下が三面黄ミドリ色に囲まれ明かるかったが落ち着きの無い空間で周囲から浮き上がっていた。

二箇所目は根府川寄りの場所であるが、同様に100mほどの橋梁で足場を組み上げて黄ミドリ色に塗装中で、ここは円筒型の橋脚と台座も同様の色だが、橋脚部は緑味の濃い黄ミドリ色であった。

ここで特筆すべきは根府川寄りのコンクリート台座とそこに連なるコンクリート擁壁(高さ約5m、長さ約50m)が例の黄ミドリ色であった。

そこは道路の海岸端の高さ10mほどの擁壁の下半分で、上半分は地元産根府川石のケンチ石積、海岸は根府川石の磯となっていて道路上部は樹林の緑、右方の海の向こうには緑に覆われた真鶴半島が横たわるという美しい自然景観を台無しにしている。

その時、DICの色見本帳で確認すると場所ごと微妙に異なる(たぶん経年変化、下地などによる影響か?)がおおむね-DIC359-であり色見本帳上では黄緑色系というよりもモスグリーンの淡い色という色味で驚きました。

その理由は真鶴有料道路の主景観が灰茶色の根府川石の岩場と黒松を初め海岸沿いの濃い緑の常緑樹と太陽光の中にこの人工色彩を配色すると、ひどく目立つ明るい黄ミドリ色(私には-DIC 60か59-)と感じられたようだ。

この現象は建設関係者なら多くの人が大なり小なり経験していることで、小さい色見本で指定したものが広い面積の壁面や床面になった時に考えていたよりも明るく鮮やかになってしまふアレだなと思いました



早川～根府川間 橋梁下



東京・目黒通り歩道橋

が、それでも周辺環境をもっと考慮した色彩を塗装法も含めて指定して欲しいと考えました。

真鶴有料道路の管理担当の道路公団、小田原管理事務所に問い合わせると、屏風岩トンネル部は公団の担当であるが早川、根府川間は国道135号線で神奈川県が担当であり、道路関連施設の色彩に関しては地元の漁業組合の要望でグリーン系（魚が好むと言う理由）となっていて各事業ごとに漁協と相談して決定している、またトンネル口の色彩決定に関しての経緯は現在の担当者では不明とのことであった。

3. 道路安全施設と塗装色

この黄ミドリ色はどこかで見た色だと思い巡らし、歩道橋とガードレールや照明ポール（これらを総称して道路安全施設という）に同様の塗装色があることを思い出しました。

さっそく身近な所を探して見ると歩道橋は湘南海岸の国道134号線、神奈川県の内陸を東西に走る国道246号線、東京の目黒通りなどに、ガードレールと照明ポールは自宅近く（世田谷区）に確認した。

まず建設省の道路局に問い合わせると、その件に関しては「道路技術基準通達集」というものに掲載されていて歩道橋の色彩は周辺環境を考慮して各道路管理者が決定、ガードレール（対車用保護柵）は白色、

人用は自由、照明ポールについては特にないが設置の際には景観に配慮とのことであった。

それから東京都の道路局でも同様の質問をすると、それは東京都の「道路工事設計基準」にていて

- ・歩道橋に関しては都内の放射及び環状の主要幹線道路は各々色指定（社団法人、日本塗料工業会標準色）していて、目黒通りは放射3号線といい前述の標準色記号では「P12-412」が例の黄ミドリ色ということで、その法人に連絡するとその記号は『淡い抹茶色』といい-DIC359-に近い色だが数年前に表示法が変わりくU35-7OH>となったとのことである。
- ・防護柵は対車用は原則として白、イチョウマークの都型パイプ柵は濃緑色（P30-505），通学路では緑色（P34-456）とするとなっている、自宅近くのミドリのガードレールは小学生の通学路ゆえであった。
- ・自宅近くの照明ポールの黄ミドリ色は区道で世田谷区が設置したものであった。

4. おわりに

公共の事業ではともすると前例にこだわり、限界な日本の都市の道路景観を造り出している道路施設の色彩をそのまま規模の大きな橋梁やコンクリート構造物にも採用してしまうのではないか。

道路景観において、きれいな色イコール美しいものとは限らないことも多く、周辺環境との調和が重要である。

この黄ミドリ色（『淡い抹茶色』U35-7OH）は色見本帳では淡い落ち着いた色だが太陽光の下では黄色味が強く感じられるので橋の下や排気ガスの多い暗く汚れがちな所では向いているが、豊かな自然景観の所にはもっと明度、彩度の低い色が良いであろう。

とにかく大きな施設の色彩を決めるには、現地で何平米かの大きめな色見本を作り確認することが必要で間違いも避けられるであろう。



真鶴有料道路 早川～根府川間擁壁

発見システム

申 珠莉

JULIE SHIN

女子美術大学

さて、それでは実際にシミュレーションを通して、かんちがいデザインなるものを発見してみたい。

デザインにおいて、正解なるものがたつた1つというわけではない、ということはおそらく誰もが認めるところだろう。しかし首を傾げざるを得ないものが少なくない。その大きな要因は、たとえば、自然との調和といえば植物や水や緑色を取り入れさえすれば事足りりとするようなこと、さらには、とりあえずグッドデザインを集めるというような考え方、すなわちその場におけるありようとありかたが十分に検討されないことにあると思われる。いわゆるグッドデザインの寄せ集めが即グッドデザイン的な環境にはなれないこと、すべての場合においてオールマイティーに快・適とはいえないということを考えなければならない。

とりわけ私たち環境デザイナーが環境デザインをするということは、問題の解決のために選択を迫られ各プロセスのなかでそれぞれ選択をしていくこと、ともいえよう。表1は、対立する2つの評価の価値感で作成されているが、そのどちらかの価値感が優位であるという意味はもたせていない。求められるデザインコンセプトは、ケースバイケースで異なるはずであるからである。しかし、その選択は、いまでもないが、ヒト・モノ・バそしてトキに関係づけられた選択でなければならない。そしてデザイン要素としての色・形態・材質の問題もそれぞれ個別に取り上げられるものではなく、それらの関わりの中で選択されなければならない。そして、よく取り沙汰される地域性やスケールの問題などは、これらの関係の検討のなかに自ずから見い出されていくものと考える。

街には、様々な思いからのデザインが展開されている。そのなかでも典型的、すなわちありがちありがちと思われるそれらのいくつかを、前掲の「色景」でも取り上げている真鶴のトンネルに適用してみることにした。それらを実際に自分の目で見て、快・適と感じることができるか否かを確認することによって、それぞれの考える、かんちがいデザインなるものを発見していくだきたいという思いからである。

すべての色は使いようである。

色を見て感じる程度、感じ方、反応などには個人差が認められている。その良否には見る人の感情が大きく作用するということである。しかし、色彩を単に色相・彩度・明度の問題として処理するのではなく、

組み合わせ、面積的な広がり、直接光・反射光の心理的・物理的影響などの広観囲において議論し、共有できる価値観として提案することが必要とされている。

景観の色彩は、天候や季節、時間、その他観察状況などの各種の条件によって異なって見える。「見かけの色」といわれ、各種の条件によって、本来の色と異なって見えることは、景観の色彩選定において特に留意しておく必要があると考える。そして同じ色でも、例えば、草木の緑と塗装された緑のようにその材質によっては、与えられる心理的効果も異なるのである。また、地域、地方によっては景観の色が異なり、基調となる色とは、その土地の馴染んだ色であると考察できよう。色相の明度・彩度との調和性もさることながら、このような周辺環境との色彩調和についても十分配慮することが求められる。

その地域の風土や歴史環境に共感できる価値を探る。

おそらく形態に表われやすい事柄として考えられるのは、地域性やスケールなどの表現の問題であろう。これらの問題において共通しているのは、形態の選定の理由と表現された形態との関係における、あまりの単純明快さであろう。説得できないコンセプトや押しつけがましい表現などがそれである。

語るモノの捉え方は、その地域の風土や歴史環境の共感できる価値についての再認識と再発見から見い出されたものでなければならない。用いられた色や形態や素材など、それ自体では意味をなさない場合でも、新たな意味づけを行うことは可能である。それはどのような技法を通じて展開されるか、または技法自体の妥当性や洗練度による。スケールアウトは、基調となる空間にその良さを損なう新たなスケールの導入で起こる。周辺環境との関係から切り離して、スケールを語ることはできないのはもちろん、視点と認識されるスケールの関係にも留意しなければならない。地形の特性を読み、景観への適切な表われ方を探っていくなければならない。素直に地域の景観や環境に埋没し、溶け込むデザインが必要ではないか。

感じや感触、強度や安全性、リサイクルへの発想などから探る。

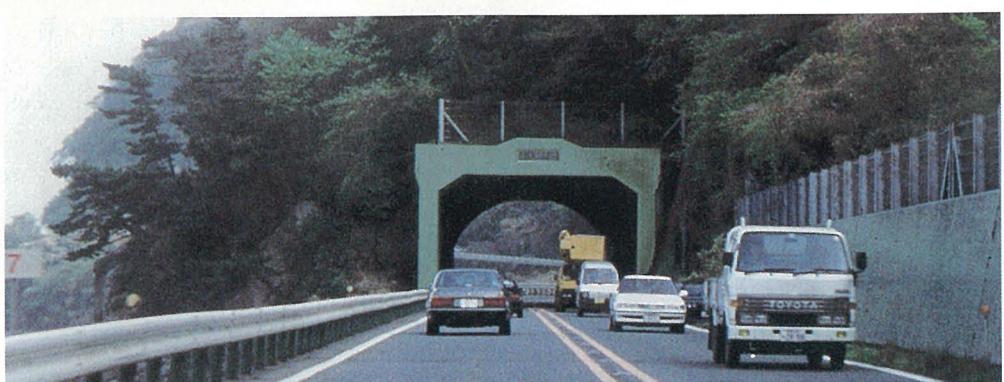
新しい、または国際的な情報を源としてすることで画一化されやすくなってしまうデザインに対する危惧は、バに固有の、かつ適

する素材を探すことから導き出されるものが多くないため、言い替えれば、どこでも同じ素材を使うことで生み出される景観にも見受けられる。周辺の自然・人工の度合、地域性、周辺環境との調和や相性、色・形態・スケール・テクスチャなどが、素材に深く関わるものとして考慮されなければ

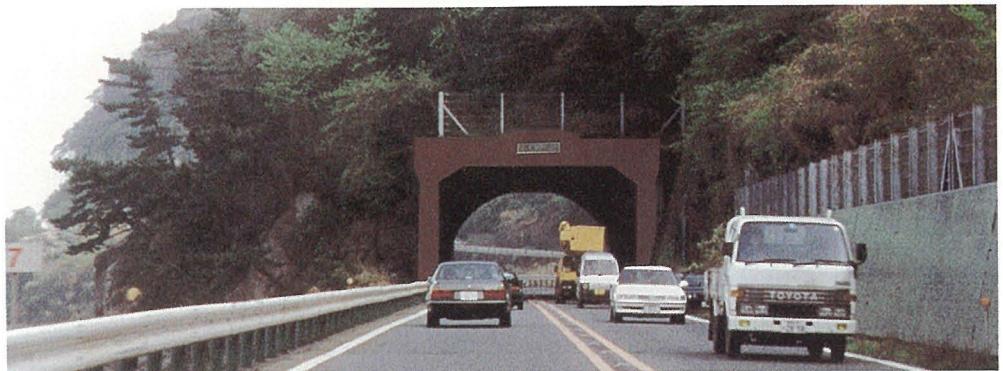
ならない。自然材であれ、人工材、加工材を問わず、外見上の見てくれだけに頼るのではなく、感じ、感触、強度や安全性、リサイクルの発想などの面からも考察され、合目的的・審美的に対応すべく計画し、造形されるべきである。

伝統的な	個性的な	楽しい	目立たない	古くさい	話題性のある	快適な	不調和な	洗練された	流行の	都会的な
非常に かなり やや どちらともいえない やや かなり 非常に	どちらともいえない やや かなり 非常に	野暮な 普遍の ローカルな	調和した	不快な つまらない	モダンな 目立つ	話題性のない つまらない	不快な つまらない	調和した	野暮な 普遍の ローカルな	不快な つまらない
革新的な	一般的な	つまらない	目立つ	モダンな 目立つ	話題性のない つまらない	不快な つまらない	不快な つまらない	調和した	野暮な 普遍の ローカルな	不快な つまらない
非常に かなり やや どちらともいえない やや かなり 非常に	どちらともいえない やや かなり 非常に	野暮な 普遍の ローカルな	調和した	不快な つまらない	モダンな 目立つ	話題性のない つまらない	不快な つまらない	調和した	野暮な 普遍の ローカルな	不快な つまらない
非常に かなり やや どちらともいえない やや かなり 非常に	どちらともいえない やや かなり 非常に	野暮な 普遍の ローカルな	調和した	不快な つまらない	モダンな 目立つ	話題性のない つまらない	不快な つまらない	調和した	野暮な 普遍の ローカルな	不快な つまらない

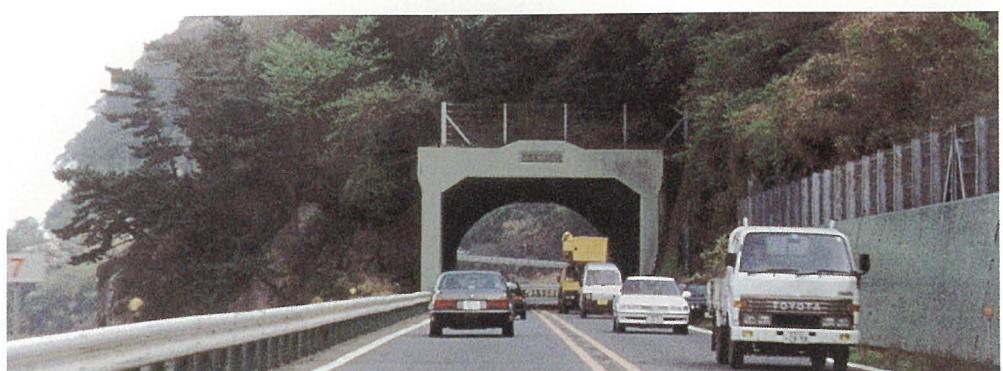
評価の価値感（表1）



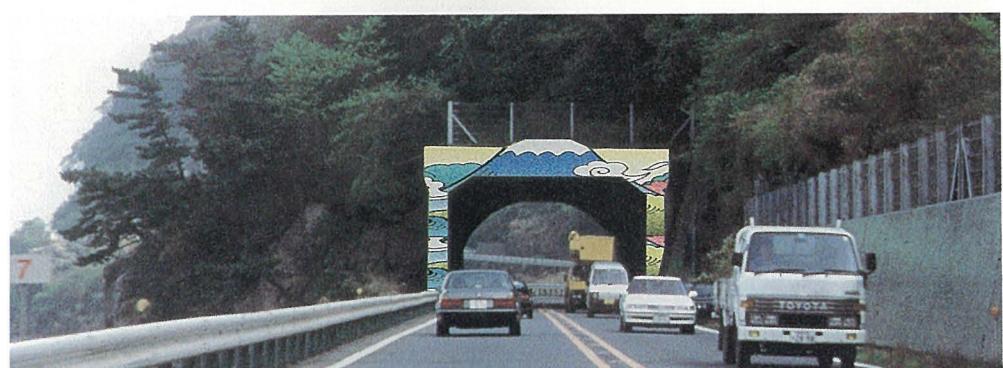
●色相は保ちながら彩度と明度を落とすだけ？（写真1）



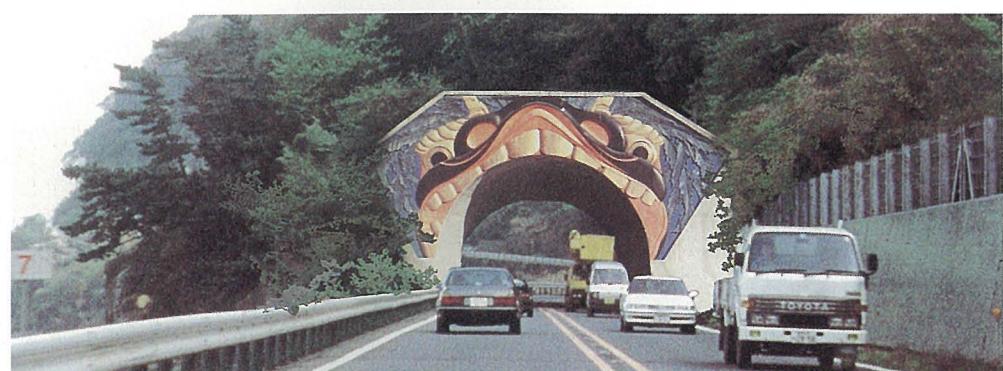
●彩度をそのままで、色相と明度を一般的な煉瓦色に？（写真2）



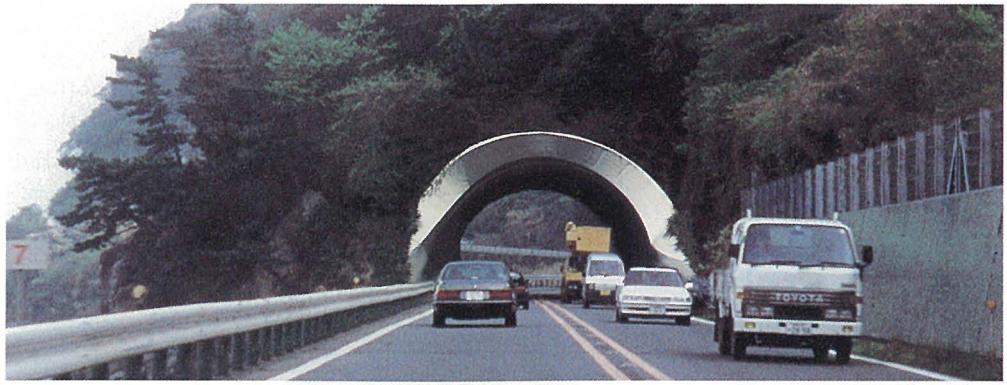
●色相を灰色系にして明度を若干さげる？（写真3）



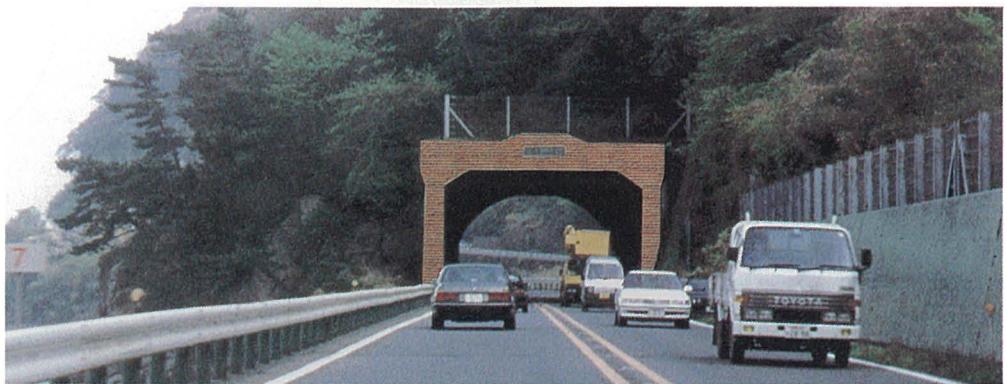
●語るモノのテーマ・意味・技法そして洗練度？（写真4）



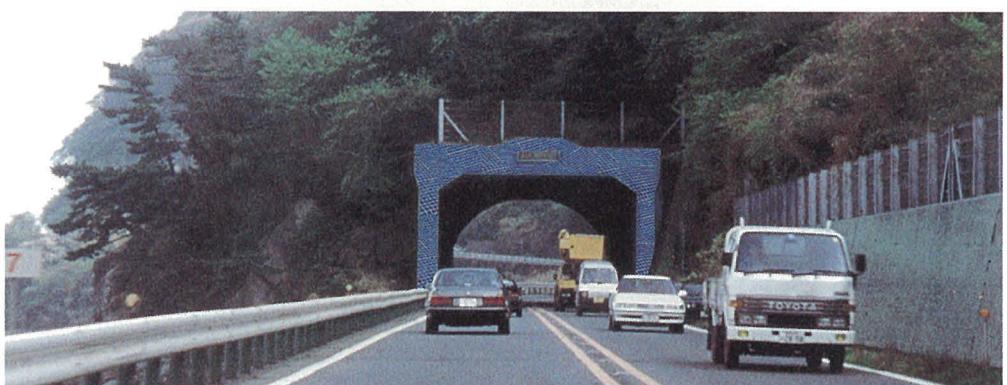
●視点と認識されるスケールの関係に留意？（写真5）



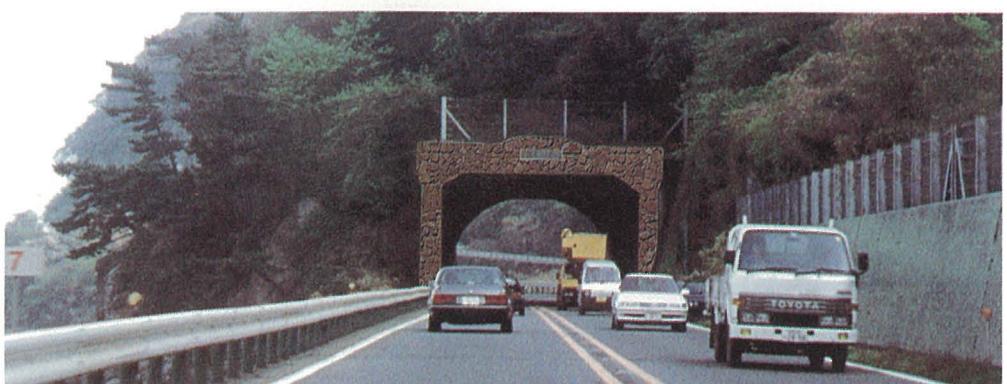
●地形の理に沿った形態のありよう？(写真6)



●場に固有の、適する素材？(写真7)



●素材に見るべき用と構と美？(写真8)



●色と質感の素材？(写真9)

ブロック例会レポート

■関西ブロック

長谷川 弘直

HASEGAWA HIRONAO

関西ブロック幹事

株式会社環境計画研究所

◆98年第3回都市環境デザイン・セミナー

<報告>

●主旨

阪神・淡路大震災はそれぞれの地域において培われ、人々に親しまれてきた景観を大きく変貌させた。震災から3年が過ぎた現在、頑固としたまちづくりの目標をもって、復興の第2段階に取り組んで行かなければならぬ時期を迎えている。

復興地の景観がどのように変貌したのか、そしてどのような新たな景観づくりを目指さなければならないのか、その展望と将来について語る。

平成10年4月25日（土）神戸市三ノ宮のフェニックスプラザにおいて「震災復興景観の現状とその目指すべき方向」をテーマにセミナーが開催された。会員以外の専門家や市民の参加を得て、それぞれがこの3年間取り組んできた実践事例や経過報告があり今後も地に根をおろした長期的視野にたっての活動や展開の重要性が確認された。

司会：鳴海 邦穎（大阪大学）

講師：堀口 浩司（アルパック）

横山 宜致（都市緑地研究所）

上山 卓（コープラン）

◆98年第4回都市環境デザイン・セミナー

今や21世紀への地球について考える時、総体としての「環境」をぬきに語ることは出来ない。身近なテーマとしてまちづくりに関わる我々には人間と様々な生物・植物などとの良い関係づくりから、住むための空間づくりにおいて共生の論理は不可欠である。今回のセミナーでは環境との共生、自然環境の復元をテーマに都市緑化における様々な試みが行われていて、また、そのプロセスや結果に注目されている。今回は事例として大阪市内の天王寺区で実際に住みながら建物緑化を実験的に行なっているNEXT21を題材に都市緑化の意義・可能性そして入居者からみた緑地の意味等について報告していただき、フロアーの人たちと共に住むための都市緑化の可能性について考えてみた。

平成10年5月23日（土）14:00～17:00実験集合住宅 NEXT21 2F NEXT21ホール

司会：鳴海 邦穎（大阪大学）

講師：福廣 勝介（住宅都市整備公団：造園計画）

江木 則吉（アトリエE2：NEXT21緑地設計）

丸谷 聰（日本野鳥の会：NEXT21生態系観測）

加茂 みどり（大阪ガス：NEXT21居住実験担当）

◆98年第5回都市環境デザイン・セミナー

<報告>

平成10年6月20日（土）13:30より神戸三ノ宮の神戸学習プラザ第5講義室において、「海外都市の密集市街地に学ぶ」をテーマに開催された。

●主旨

住宅密集市街地には、地区ごとに様々に異なる形成過程と実態があり、その対策も多種多様な検討と工夫が必要となる。こういった密集市街地対策への工夫の視点を広げるために、海外で顕在化し、あるいは対策が講じられている密集市街地をとりあげ、

①なぜそこに密集市街地が生れたか

②その密集市街地が都市で果たしてきた役割

③何が問題なのか

④誰が、どう改善しようとしているか（改善されたか）

といった切り口で事例を学び、密集市街地への興味の輪をひろげていく。

司会：難波 健（兵庫県都市住宅部）

発表者：

①インドネシアKIPについて

脇田 祥尚（島根女子短期大学講師）

②ヨーロッパ都市の密集地区の改善

小浦 久子（大阪大学助教授）

③世界の木造密集市街地概観

鳴海 邦穎（大阪大学教授）

コメンテーター：有光 友興（環境開発研究所）

◆都市環境デザイン・セミナー98 I N尾道

/<広島県>

<報告>

平成10年7月18日（土）中国ブロック、関西ブロック共催で尾道市政施行100周年記念事業の一環として市の後援を得て、「路地」から見た「まちづくりの作法」をメインテーマにセミナーを開催した。セミナーに先立って、午前中は路地ツアとして山手地区（住宅・社寺）、新開地区（飲食店街）に別れ、それぞれが地元の森重彰文氏（尾道市教育委員会文化課）、大崎義男氏（尾道市まちづくり活動家）両氏に案内役をお願いしてまちの魅力を探索した。

●午後からのセミナーは尾道市共同福祉施設を会場として行った。関西・関東ブロックからも50数名の参加があり、中国ブロック、尾道市、広島、倉敷など近隣都市からも多数の参加があり、総計110名を越える参加者による大セミナーとなった。パネルディスカッションに先立って尾道市の都市デザイン課長の村上久氏により、歓迎の挨拶をいただいた。

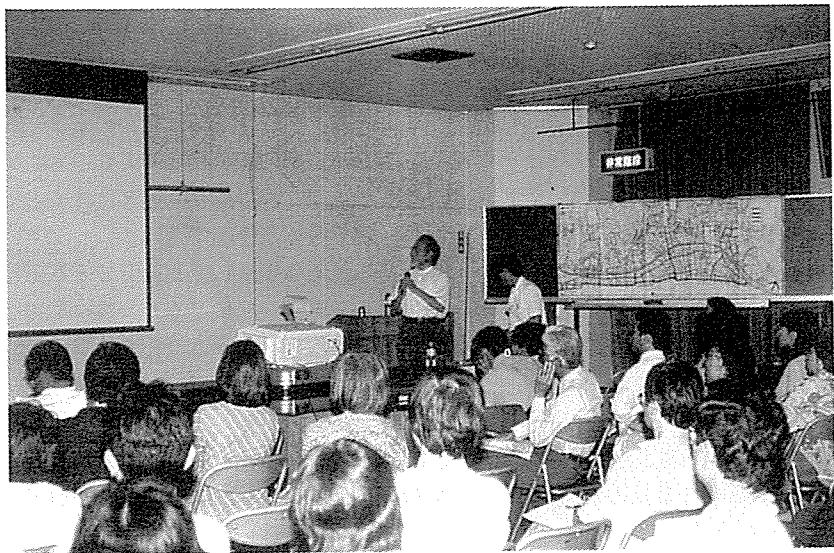
パネルディスカッションのテーマとして

「尾道と世界のまちからまちの魅力と謎に迫る」というワクワクするようなテーマで始まった。最初に森重彰文氏より、歴史・文化からのまち尾道について基調講演があり、続いて5名のパネラーから路地とまちづくりや文化や海外の路地と尾道の路地などそれぞれが興味ある報告などがあった。さらにフロアーとのディスカッションがあり、最後にコメンテーターの鳴海邦碩氏（大阪大学）より、インドネシアの路地についての紹介をはじめて路地文化の魅力の要因や違い、有りようなどについての総括で締めくくった。

セミナーは予定の時間ではるかにオーバーして閉会し、第2ラウンドは焼鳥のうまい「村一番」と瀬戸の小魚がおいしい「輝」を借り切って料理と酒でのセミナーが夜おそくまで続いた。

◇出演

開会：西 斗志夫氏（主旨説明、JUDI紹介）
 ＜住都公団・関西ブロック＞
 歓迎挨拶：村上 年久氏（尾道市：都市デザイン課長）
 講師：森重 彰文氏（尾道の路地形成の歴史ほか）
 ＜尾道市教育委員会文化課＞
 司会：西 斗志夫氏
 パネル：大崎 義男氏（尾道の路地と文化）
 ＜尾道市民まちづくり活動家＞
 寺本 和雄氏（松江の路地と尾道の路地）
 ＜寺本建築・都市研究所・中国ブロック＞
 江川直樹氏（イスラムの路地と尾道の路地）
 ＜現代計画研究所・関西ブロック＞
 井口勝文氏（イタリアの路地と尾道の路地）
 ＜竹中工務店・関西ブロック＞
 上野 泰氏（自己生成的なまちと路地）
 ＜ウエノデザイン・関東ブロック＞
 コメンテーター：鳴海 邦碩氏（大阪大学・関西ブロック）



尾道セミナーの様子

■ 9月8年都市環境デザイン会議関西ブロック海外セミナー／ジャワ&バリ JUDI関西ブロックでは昨年10月イタリアのメルカッテロセミナーに続いて、第2回海外セミナーを9月21日（月）よりインドネシアのジャワ及びバリで行うことになりました。

詳細なプログラムは下記の通りですが、残念ながら参加希望締切りが原稿を書いている今日、7月24日（金）までとなっております。

興味のあるセミナーの結果は次号のJUDI NEWSで詳しく報告いたします。

＜パート1＞歴史的都市の保全と活性化／ジョグジャカルタ

共催：ガジャマダ大学建築学科

◇9月21日（月）名所見学

ボロブドール、フランバナン、千の寺等、希望があれば田舎巡りも

◇9月22日（火）日本を知るセミナー

講義1：日本の都市環境デザイン（日本側）

講義2：日本の歴史的環境の保全（日本側）

昼食、休憩の後、歴史的地区見学

宮廷、タマンサリ（水の宮殿）、カウマン（敬虔なイスラム教徒の居住区）、コタグテ（銀職人の町）など。

◇9月23日（水）ジョグジャカルタを知るセミナー

講義1：ジョグジャカルタの歴史と建築遺産（ガジャマダ大）

講義2：ジョグジャカルタの社会と伝統産業（ガジャマダ大）

昼食、休憩の後、ディスカッション

テーマ：歴史的都市の保全と活性化を考える。

夜：交換パーティ

◇9月24日（木）移動／ジョグジャカルタ→バリ

＜パート2＞

アルディ博士と歩くバリの伝統集落

◇9月25日（金）伝統芸能を観る

ウブド、ブリタアン、原則として自由行動

◇9月26日（土）伝統集落を歩く。

トゥンガナン、ブブク、クルンクン、ティヒンガン

夜：アルディ博士が語るバリノ文化

●申し込み

JUDI関西ブロックセミナー委員会

鳴海邦碩（大阪大学）

FAX：06-879-7681

◆以上のセミナー報告は

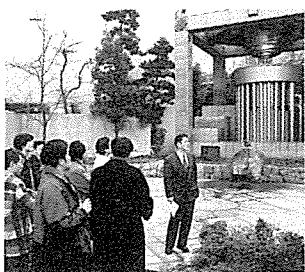
<http://web.kyoto-inet.or.jp/org/gakugei/judi/index.htm>に公開予定。

■北陸ブロック

塙 正浩

RACHI MASAHIRO

株日本海コンサルタント



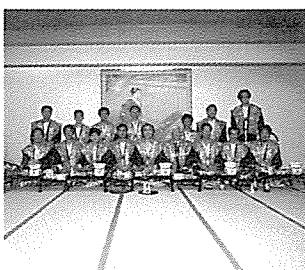
現地視察



ブロック会議



シンポジウム



懇親会

都市環境デザイン会議北陸 i n 石川

北陸ブロックでは、毎年各県で持ち回りによる研究会やフォーラムを開催しており、今回は石川県が担当ということで、本県の一大観光地である加賀温泉郷を舞台に「温泉観光地と景観整備」というテーマで現地視察とシンポジウム等を開催しました。

1. プログラム

●平成 10 年 2 月 22 日 (日)

- ・加賀温泉郷現地視察 (栗津・片山津)
- ・JUDI 北陸ブロック会議
- ・懇親会

●平成 10 年 2 月 23 日 (月)

- ・加賀温泉郷現地視察 (山代・山中)
- ・シンポジウム「温泉観光地と景観整備」
—長期的活性化施策の 1 つとして—
場所: 加賀市文化会館

2. 内容

①加賀温泉郷現地視察 (4 温泉)

加賀温泉郷の山代・山中・片山津・栗津の 4 温泉について、これまでどのような景観整備が行われてきたかをメンバーで視察した。

②都市環境デザイン会議北陸ブロック会議

- ・新会員の紹介 (田中氏、加藤氏)
- ・パブリックデザインフォーラム i n 高岡について
- ・ガイドブックの各県の進捗について
- ・意見交換

以上について協議を行った。

③シンポジウム「温泉観光地の景観整備」

- ・主催: 石川県、石川県観光連盟、小松市、
加賀市、山中町、JUDI 北陸
- ・協力: 山代、片山津、栗津、山中各温泉
観光協会

<開催趣旨>

国内観光が全体的に低迷しているように、北陸の温泉観光地も浴客数の減少が著しい。その対策として短期的な活性化戦略はそれぞれ各温泉地で実施されているが、長期的な活性化策については、現状ではどこもその方途を見いだせないでいる。

一方、浴客を増加させている湯布院温泉などでは、温泉地全体から個々の旅館に至る空間の整備、地元産にこだわる物品、優しさあふれるホスピタリティー等を売り物にすることで、女性客、グループ客に受けている。ここには 10 年来言われ続けてきた歓楽型からリゾート型への移行が実現している。

石川県においては昭和 63 年度より 10 年間、温泉活性化対策として県内 6 温泉の修景事業を継続してきた。その結果、温泉街は徐々

に整備されてはいるが、充分と言える状態ではない。

今回の討議のテーマは、長期的活性化対策として加賀 4 温泉にて行われてきた 10 年間の景観整備事業を振り返り、その成果と反省点をあげ、今後の方向について提言を求めるものである。

<討議>

「温泉活性化修景事業」の評価と今後の提案

コーディネーター 水野一郎 (金沢工業大学教授)

パネラー 山下拓治 (山代温泉観光協会理事)

関憲志郎 (片山津温泉観光協会理事)

金森千栄子 (浴客、ゲーティングデザイナー)

樋口忠彦 (新潟大学教授)

十代田朗 (新潟大学助教授)

討議では、以下のような意見が出た。

・景観づくりは、一つの文化事業である。非常に長い時間をかけて積み重ねていく。そのためには将来を見据えたコンセプトが必要である。

・浴客がそぞろ歩く温泉街をつくるためには、街中に企画や行事を散りばめることが必要である。

・景気低迷の時代だからこそ、1 温泉だけでなく広域的に誘客に取り組む必要がある。

・他にない食べ物や景観、すなわち個性を売り出すことが今こそ求められる。

・国際化が進んだ今日、英語、中国語など 4 カ国語程度の地域案内板は最低限、街の要所に配置すべきである。

・個々の温泉の歴史や伝統を活かす視点に加えて、加賀温泉郷共通の個性を模索する工夫も必要である。

・観光客や浴客が、一日をどうしたら楽しく過ごすことができるのか、その人の身になつて環境を作つて行くことが景観づくりの原点である。

・旅館、住宅、商店など一つひとつが景観として面的につながり、それを見るために浴客が街中出でていって、街もにぎわい、商店街も活性化する。

・温泉街には、旅館の従業員を含め、多くの人が住んでいるが、景観整備によるアメニティ環境づくりは、住んでいる人自身にとつ豊かな生活を送ることができる。

・これから 10 年は、各温泉街でそれぞれコンセプトやストーリーをもう一度つくり、その再構築からスタートさせたらよい。

④懇親会

懇親会では、北陸の冬の味覚を十分に堪能し、温泉にもゆったりとつかり、大いに議論も交わし、そして夜ふけるまで楽しく盛り上がりいました。

■四国ブロック

白石 高啓
SHIRAISHI TAKAHIRO
四国ブロック幹事

ゆにて設計事務所

まちなみウォッチングIN出羽島（ミセ造りのあるまちなみ）が「建築文化週間98」によって日本建築学会四国支部で1998年6月20日（土）開催され、JUDI四国ブロック会員も協力した。すでにJUDI NEWS 四国 98.5. 12 VOL15で事業内容は報告済みなので、当日の状況と6月21日（日）A.M. 8:00～9:00の四国ブロック総会をまとめた。

◇ 講演会1 日本建築学会四国支部主催 (13:00～14:30)

「まちの魅力とまちづくり」

講師 西村 幸夫（東京大学都市工学科教授
JUDI会員）

梅雨も一休み。天の恵みで参加者の出足も好調、会場の牟岐町漁協出羽支所漁村センターは四国各地からと島民で、100人をこえる予期せぬ嬉しい熱気が漂っていた。

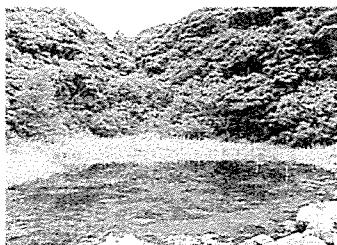
出羽島に初めて渡った西村教授は「クルマ社会から解放され風や波そして人の声が心地よく聞こえる世界にこころが癒されます。」と島の印象を語った。講演ではこれまでに、関わってこられた元気のできるまちづくり3地域「島根県太田市」「新潟県津川町」「福井県上中町」がスライドによって紹介された。これらのまちづくりは下記の如く西村教授がまとめられている。



出羽島集落



西村教授講演風景



シラタマモ自生地大池

「まちの魅力は結局そこに住み、自分の住むまちを誇りに思い、愛しているひとの魅力に帰するように思える。そしておもしろいことに、魅力的なひとが住んでいるまちはほとんど例外なく魅力的なのである。まちの魅力はその土地に住むひとの魅力によっておおきく左右されるのである。住み手の思いを知ってそのまちをながめることによって、いかに奥深くまちの趣が広がっているかを知ることになる。」（町並みまちづくり物語 西村幸夫 古今書院より）より広い視野からの確な支援をされた、西村教授の「熱きこころ」がまちを目覚めさせる原動力になっている。ここ出羽島も南北直径982m・東西直径625mを約1時間かけて観察してみると、テングサ干しで忙しく働く人たち、集落のミセづくり（玄関横にあってたためば雨戸、下ろせば縁台、上げれば蔀戸・軒天）や、世界に4カ所しかないシラタマモ・亜熱帯植物・変化に恵まれた風景等、宝の山になりうるビオトープ樂園の条件があるような気がする。

◇ 講演会2 都市環境デザイン会議 四国ブロック主催 (17:00～16:00)

「ミセ造りと町のコミュニティ＊震災復興コレクティブハウジングとの比較＊」

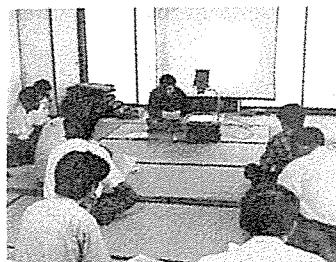
講師 小林 郁雄（ユー・プラン JUDI会員）
講演会場を牟岐町内妻「民宿 白木屋」に移し、阿波のまちなみ研究会と親しい講師の小林郁雄氏が何度も視察している「ミセ造り」をベースに有意義な講演をされた。

震災復興でご自身の事務所倒壊の体験もされいる為か、言葉の端々にリアリティーを感じた。

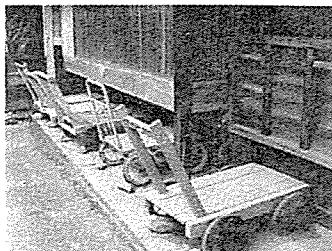
震災以後、兵庫県では高齢被災者の柔らかいコミュニティをイメージした「コレクティブハウジング=共同居住型集合住宅」が実現し、そこから派生するいろいろの問題点、出羽島で見たミセ造りの共通性などがOHPによって具体的に語られた。

またコレクティブハウジングの先進国スウェーデン・デンマークや、原風景のブータン・バリ島などの視察によって日本型の生活様式を探求したことやコレクティブハウジングの研究者小谷部育子教授（日本女子大学）から多くの示唆を与えられたことなど。しかし現実は、この住宅の特徴でもある「ふれあいのスペース」は人間関係の複雑さによって、クレームの発生源となるらしい。このような新しいコンセプトの集合住宅は、これから多くの問題点が指摘されるだろうがそれによって建設的な方向に向かうならば、素晴らしいことだ。それを成功させるにはミセのコンセプトが重要

なポイントとなるだろうと語った。



小林講師が語る



出羽島のくるま 手押し車



ミセ造り（海部町鞆浦）

◇四国ブロック総会及びミセが分布する阿波歴史文化回廊＝紺碧回廊（今回は牟岐町・海部町）について

朝食後の慌ただしい四国ブロック総会（8:00-9:00）で大西泰弘幹事からバトンタッチし、第8期（1998年度）は同氏の努力によって会員21名（+1名申請中）、本部活動費も50,000円アップの200,000円となり、より積極的な企画によって環境デザイン土壤を拓いてゆこうと会員の意氣が伝わってきた。同席の小林郁雄講師からも「これまでに立派なフォーラムも開催しているのでは非、全国の会員にも伝えてほしい」と要望された。梅雨空の下、両講師と共に牟岐町界隈のミセ造りを熱心な地元の人のガイドで見学し、その後、究極のミセ造り・海部町鞆浦に阿波のまちなみ研究会のメンバーに案内された。漁師集落らしい潮の香りと濃密な住まいの路地環境だった。紺碧回廊の一部を垣間見た徳島の海岸沿いの旅は、まなざしを避ける都市に於いて、これから求められる解放的で、柔らかいコミュニケーションの形成にはミセ造りの知恵が大切な要素となるだろうと、忘れていた「ふれあい空間」のイメージが目覚めてきた。



後藤家住宅（牟岐町中村本村）



鞆浦集落の路地空間（海部町）

■関東ブロック

地福 由紀

JIFUKU YUKI

関東ブロック幹事

株アトリエ福

7月視察会報告：臨海副都心プロジェクト

日時 平成10年7月12日(日)

9:30~12:00

行程 JR品川駅 集合

↓ 貸切バス

デックス東京ビーチ

お台場海浜公園

↓

東京みなと館

↓

ドリームブリッジ

↓

東京ビックサイト

案内役 橋渡達也氏

(元 東京都公園緑地部長)

□視察会内容

総会の翌日である7月12日、関東ブロック主催の7月度の視察会が実施された。視察地は何かと世間をさわがせた臨海副都心である。当日は、時々薄日がさす程度のはなぐもりの天気で気温も低く、最適の視察日和であった。

JR品川駅に集合した一行は27名。貸切バスに分乗し、一路臨海副都心へ。バス

の中では案内役の橋渡氏から配布資料と共に臨海副都心プロジェクトの全体計画について、準備段階からの計画側の苦労話等を交えて説明が行われた。

全体の行程は、バスで移動しながらお台場海浜公園付近、東京みなと館、ドリームブリッジの3カ所でポイント的に下車して見学した後、東京ビッグサイトにて自由解散となった。

デックス東京ビーチ、お台場海浜公園付近は唯一副都心の中でぎわっている場所のようである。建物が外に開かれていて、

公園とのネットワークがとれているせいなのだろうか。海を感じられる場所を自分の好みに合わせて選べるバリエーションが魅力なのかもしれない。

東京みなと館は青海フロンティアビルの最上階にあり、副都心をグルリと見渡す事ができるロケーションの良い場所で、夜ともなればデートスポットとしても最適だとか。江戸期から現在、未来の臨海副都心の姿について、パネル、模型等でレクチャーをうけて入場料200円はお得。宣伝があまりされていないせいなのか、入館者が少ないのが残念である。どうぞ御利用を。

ドリームブリッジについては、あまりにもビッグスケールで周辺の空地の中に忽然と姿を表わしたといった風であった。

□臨海副都心 光と影

最近とんと元気のない、あの青島知事誕生の源ともいえる臨海副都心へ初めて足をふみ入れた。他の参加者も多分始めての方が多かったと思う。再来者でもビッグサイトだけ用があつて来たというように、ポイント的に来た事があつても、全体像を把握している人は少ないのでないだろうか。

それぞれの建築施設や拠点は、技術の粋を集めそれぞれの計画コンセプトに沿った整備は行っているようだが、互換性がなく自己完結型が多いよう思う。点の連続は確かに線になり、面になるが…。臨海副都心プロジェクトの計画コンセプトや全体像がよく見えない、というのが視察しながらの率直な感想である。

キラキラ光る各施設が点在している中で、時代の流れに翻弄される影の部分が重ねあわさって、さびしげで孤独な町に見えてしまったのは私だけであろうか。



視察風景



青海アロンティアビルより望む臨海副都心

委員会活動報告

■事業委員会報告

第1回JUDI交流サロン報告

従来型のモニター・メッセが社会経済的な動向から開催が難しいとの判断から、98年度の総会では、新しい形の実験的な試みを事業委員会の提案に従つて始めた。それがJUDI交流サロンとモニター・メッセ・レビューという2つの総会時イベントである。前者は主として会員相互の意見交換会で、企業の方々の参加も拒まないもの、後者は

従来のモニターメッセを簡略化したもので、会員と関連企業の方々との交流を目的としている。後の懇親会での話題づくりとしては、この形式の方が優れているのではないかとの議論からこのような形を試すことになった。

交流サロンは、会員の中から時宜に適ったテーマに関して話題を提供するパネリストを数名選び、話をしてもらった後、総会

に出席する会員との間で本来の姿のシンポジウムを行おうとするものである。第1回は、わが国の経済・社会的な重大なターニング・ポイントにさしかかっているとの認識からテーマを「次世代都市環境への課題」と定め、当会議の重鎮である西沢健さん、高橋志保彦さん、加藤源さん、土田旭さんに登場いただくこととした。コーディネーターは西沢さん。

発議としての次世代へのターニング・ポイントの視点は、

1. 成長という前提の喪失、
 2. 中心市街地の危機、
 3. 高齢者比率の著しい高さ、
 4. 地球環境意識の芽生え
 5. 市民参加意識の台頭、
- の5点を挙げ、これらが明日の都市デザインにどのような課題をもたらすのか議論しようということで始められた。

壇上からは、

- ・成長を前提とするのでなくとも事業優先主義的性格は変わらず、その中で事業に振り回されることなく、フローからストックへの思想を堅持することが重要。
- ・近代都市の役割は終わりつつあり、新しい都市像を提示する好機。
- ・浪漫的な専門家の都市像では社会との勝負ができない。だめになるところはだめになるという厳しさを持って、振り子が振れ戻る時に何をするかを考えておくことが大切。
- ・高齢者だらけの時代だからといって都市の本質は変わらず怖れることはない。
- ・地球環境を考えると、コストの高い空間
- ・環境の仕掛けを持つことではないか。
- ・参加型の方法とはプロセス的な方法であり、その場面と方法の選択に係わって専門家が、付託されている見えないものへの期待に応え、まとめて行くより他には無いのではないか。
- ・デザイナーはひとりよがりのデザインではなくデザインの公共性にもっと意を払うべきだ。
- ・事態を世紀末極論的に捉えるのは危険である。激しく揺れるにしても、決して不連続ではなく、ある種の連続性は保たれる。その時の多様性の問題として解けば良い。
- ・むしろJUDIとしては2000年に10周年を迎えるが、その時の活動を都市とは文化であるという視点からしっかりと考えていけば、中心市街地問題も解決できる。
- ・情報化の進展が、まちづくりへの市民の要求を変えつつある。フィレンツェはこの50年広場をつくっていないが、それは

そのような要求が無いからである。

・ストックと思っているものが、実はストックたり得ていない。S30～40年代の建物は危ない。つくりかえる行為はいざれにしても必要。

・まちは、400mぐらいのブロックで性格が異なるようなどろがうまく行く。多様性と選択性を提供することになるから。

・参加の方法は、地方・地域毎に異なる。私たちは料理人であるという意識が重要であり、私たちの考え方をぶつけることでリードしていくことが大切だ。結果としてのコンセンサスや合意を、自分の欲望の抑制という美学でいかにまとめるかが求められている。

などが示唆された。

会場からは、

- ・一千万都市のエネルギー・水の供給などの根本的な問題を都市デザインは等閑視してきたのではないか。「わかつていた」がやらせてもらえたかったということでは済まないところに来ているという認識が重要。
- ・中心市街地問題は、商人としての「ホスピタリティ」のあり様に係わっている。これがあるところはうまく行く。
- ・旅館が街をつくっていたように、今の建築は環境をつくっているのだろうか？
- ・「まち」にとって価値あるものの保持が重要であり、その為の金を集めることを考えると、今日の所得の配分に問題があると言えるのではないか。
- ・中央からの補助金のシステムに付帯した都市デザイン・デザイナーの仕組みが、地方の独自性・個性の欠如をつくり出している。
- ・また地方も勉強のし過ぎで個性を失っている。考えなくて良い補助金の方が良いのだが、それが無い。

などの意見が出された。

さらに、環境デザイナーは、

- ・特色ある都市空間を造るための異種、異分野とのコラボレーション。
 - ・使い手の視点でシステムとモノを捉える。
 - ・身体的な感覚を超えたヴァーチャルな側面も捉える。
 - ・狭い意味のデザイナーではなく、ソーシャル・デザイナーの立場で考える。
- などの必要性が指摘された。
- またたく間に2時間の時間が過ぎ、終わってみれば、更に考えを整理し議論を深めれば、21世紀都市デザイン宣言のようなものが生まれるかなと思わせるような要素がそこそこにあった様に思える。

モニターメッセ・レビュー速報

中野 恒明
NAKANO TSUNEAKI
事業委員会委員長
株式会社アブル総合計画事務所

'98都市環境デザインモニターメッセ・レビュー開催される

総会当日の7月11日15:45より交流サロンと同会場のM1ビル25階会議室にて「'98都市環境デザインモニターメッセ・レビュー」を開催しました。

昨今の経済状況下、各企業での新商品、新技術の開発の成果が乏しく、例年のモニターメッセ行事の開催も危ぶまれておりましたが、幾つかの企業の方々から、既に展示了したものの「その後」の報告ならば参加、会員との交流を行いたいとのご意見が寄せられ、新たに「都市環境デザインモニターメッセ・レビュー」を登場させました。過去5回のモニターメッセ事例の「その後=レビュー」として、企業の負担軽減を図るべく、例年のパネル展示をやめ、OHPでのプレゼンテーション配付等で極力簡素化を図り、参加費も圧縮し再登場を呼びかけました。

結果として16社の参加申込みを受け、各社10分の短いプレゼンテーション、意見交換の時間で、時間不足の感は否めませんでしたが、成瀬恵宏、吉田博両氏の沈着冷静な司会進行のおかげで予定の18:30に5分遅れで終了しました。引き続き懇親会会場に移り、会員相互および参加企業も含めた交流も一段と盛り上がった様子でした。

参加費も圧縮した結果、いつもの団さんに事務局を依頼できず、会員自らの手作りの感は否めませんでしたが、どうにか皆様のご協力により無事完了いたしました。

今回は1会場で全参加者がモニターメッセで集中して拝聴することで出来たせいか、アンケート表も思いのほか意見記入が多く、参加企業に生の意見をそのまま提供させていただきました。目下、モニターメッセ事務局にて報告書を編集中です。



モニターメッセ・レビューの会場風景

お知らせ

■研修・研究委員会より

西脇 敏夫
NISHIWAKI TOSHIQ
研修・研究委員会

横浜市

速報!!

日本の都市デザインのパイオニア田村 明氏 都市環境デザインの明日を語る
—平成10年度都市環境デザインセミナーの概要決まる—

昭和40年代のはじめ、まだまちづくりの質に対してコンセンサスのない時代から、横浜で総合的な都市政策を推進し、都市デザインを実践してきた 田村 明 氏 が、今日の社会経済状況を踏まえ、その豊富な経験をもとに明日の都市環境デザインについて語ってくれます。

清々しい初冬の土曜日、港町ヨコハマの散策を兼ねて豊かな時間を過ごし下さい。

申し込み方法等、詳細は次号の JUDI NEWS (9月20日号)でお知らせしますが、まずは日程を押さえておいて下さい。

<都市環境デザインセミナーの概要>

日時 平成10年12月5日(土) 15:30~18:30
場所 横浜山下公園前 氷川丸
講師 田村 明 氏 (都市プランナー)
演題 「都市環境デザインの明日に向けて(仮題)」

事務局より

1. 新会員の紹介

1998年5月1日～6月30日の入会者は下記の通りです。(入会順、敬称略)

6月30日現在の会員数は、538名です。

氏名	勤務先
川崎 雅史	京都大学大学院工学研究科
伊東 孝	日本大学理工学部交通土木工学科
大沼 美佳	(株)方圓館
堀口 浩司	(株)地域計画建築研究所
清水文美子	グランブルー

2. 住所変更等(敬称略)

氏名	変更内容(新)
植本 俊介	植本計画デザイン事務所 〒151-0051 渋谷区千駄ヶ谷5-6-7 Tel03-3355-5075 Fax03-3355-5075
漆崎 忍	(有)漆崎環境設計 Tel0776-53-6710 Fax0776-53-6713
奥 史子	コピスCGスタジオ 〒630-8444 奈良市今市町3-564 Tel0742-50-4155 Fax0742-50-4156
小澤 靖一	東急建設(株)土木本部土木技術設計部 〒150 渋谷区渋谷3-11-11 Tel03-5466-5195 Faxは変更なし
薙田 朋子	(株)アスク 建材営業部技術グループ 〒230-8511 横浜市鶴見区鶴見中央 2-5-5 Tel045-503-7758 Fax045-505-3903
沢木 俊尚	(株)社会空間研究所 〒151-0064 渋谷区上原3-1-16 中外ビル Tel0462-51-8991 Fax0462-51-8971
白濱 力	サントスケープ 研究機構/鳥越けい子アトリエ 〒167-0041 杉並区善福寺4-25-15 Tel03-3301-2857 Fax03-3390-9112
鳥越けい子	(株)社会空間研究所 〒151-0064 渋谷区上原3-1-16 中外ビル Tel03-3465-9401 Fax03-5790-7291
錦織英二郎	アジア航測(株)関西コンサルタント部 都市計画課 Tel06-369-0556 Fax06-369-0538
宮野 裕子	(有)A-Line 〒550-0014 大阪市西区北堀江1-11-5 Tel06-578-1591 Fax06-578-1592
横山あおい	

編集後記

今回も遅れてしまい申し訳ございません。企画、原稿依頼は私が行い、遅れた原稿の編集、レイアウトを松村さんにお世話になりました。この企画は、今年の6月23日(火)～28日(日)までヒルサイドテラスで開催された『環の会』五周年イベント(「生のデザイン」の大テーマによる展覧会とシンポジウム)の中のユニットの一つで「公共のかん違いデザイン」というテーマで6人の環境デザイナーがそれぞれの専門分野からパブリックな施設、スペースなどの中に時折見られる疑問やそれに対する主張をパネル展示し、シンポジウムの1テーマとしても討論した企画です。自治体の担当者が良かれと思って実施したことが、少しづれていたのでは?それは造形センス、デザインに対する安易さ、方向がズレていたなど様々な原因が考えられます。

JUDIでも以前『日本の都市環境デザイン'85～'95』に「これは困った環境デザイン」として同様の事例がありましたが、これからも、良い事例のみではなく問題の多い事例も取り上げ考察(検討)していく事も重要と考えます。

(中嶋 猛夫)

JUDIニュースをカラー刷りで、という希望がこれまで何度か出ていましたが、予算の関係もありなかなか実現しませんでした。今回、一部カラーにしてみましたがいかがでしたでしょうか。印刷の都合でカラー1頁にならなかった方、ごめんなさい。今回のテーマが、公共のデザインのあり方を考えるきっかけになれば幸いです。

(松村 みち子)

広報・出版委員会

土田 旭	松村みち子
澤木 俊尚	伊藤 光造
近田 玲子	清水 泰博
菅 孝能	河本 一行
中嶋 猛夫	森川 稔
櫻井 淳	横山あおい
作山 康	吉田 慎悟